

「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2008 報 告 書

2009年（平成21年）3月

認知症介護研究・研修センター（東京・大府・仙台）
住友生命保険相互会社

ごあいさつ

認知症の人を支援するにあたって、その人らしさを大切にするという理念が掲げられてから、認知症ケアは大きく変わってきました。認知症と正しく向き合い支え合うさまざまな活動が地域に芽吹き始め、これを広く社会に伝えていこうと、「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーンを開始して、今年で5回目となります。2004年秋に行われた、「国際アルツハイマー病協会第20回国際会議・京都・2004」の場での発表会がその第1回にあたりますが、地域ケアが認知症ケアの重要な軸になっていくことを全国に、そして国際的に発信した瞬間でした。

本キャンペーンには、毎年全国各地から、認知症になっても安心して暮らせる町づくりの活動が寄せられています。今年度は各地から70に及ぶ応募をいただき、内容も豊富でユニークな発想がみられました。認知症の人を支えるという考え方から進化し、認知症の人と共に暮らしていくという共生の理念が強くなっていることがうかがえました。この中から、昨年11月の一次推薦委員会、同12月の地域活動推薦委員会（最終推薦委員会）での慎重な検討を経て、今後の町づくりのモデルとなる7つの活動が「町づくり2008モデル」に決定し、発表会にて報告されました。

本キャンペーンは優劣を競うものではありません。これまで寄せられた活動すべてに、認知症の人と地域の人々がともに尊重しあって暮らしていくための工夫や経験があふれています。報告書やホームページなどですべての活動をご紹介しますので、こうした貴重な積み重ねを参考にいただき、こういった取り組みならば自分たちの町でも始められそうだ、自分たちの活動にこの工夫を取り入れよう、と取り組んでいただきたいと思います。こうした動きが広がるよう、私たちもよりいっそうの情報提供をしてみたいです。

長寿社会にあって、認知症は、ひとにぎりの専門家や介護専門職の仕事というよりも、市民一人ひとりが自分のこととして考えていくことが大切です。さまざまな職種の方がそれぞれの立場を生かして、認知症になっても尊厳を保持して生きていくことを支える、しかも地域全体で支えるという仕組みをつくっていくことが必要です。ぜひ、認知症の人や家族とともに住み慣れた地域でともに暮らしていく活動をすすめてまいりましょう。

「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2008

実行委員長 長谷川 和夫

報告書の刊行にあたって

『認知症でもだいじょうぶ』町づくりキャンペーン２００８』では、２００８年６月より全国で認知症の人を地域で支える活動を展開している活動報告の募集を行い、慎重な検討の結果、２００８年１２月に「町づくり２００８モデル」を決定しました。

そして２００９年３月に「認知症を知り 地域をつくる」キャンペーン報告会の場において、表彰式と「町づくり２００８モデル」団体による地域活動の発表を行いました。

本キャンペーンは、厚生労働省と認知症にかかわる各団体による国民的な「認知症を知り 地域をつくる」キャンペーンの一環として行ったものです。

各活動報告の本報告書への収録にあたっては、活動している団体および個人の表現のスタイルを尊重し、原則として原稿に改変を加えることは行っていません。このため、表記に不統一の部分があります。

『認知症でもだいじょうぶ』町づくりキャンペーン２００８』は、厚生労働省老人保健健康増進等事業の補助金および住友生命保険相互会社のご支援をいただいて運営が行われました。あらためて感謝申し上げます。

本報告書が、全国各地で認知症の人とそのご家族を支える活動を続けておられる皆様のお役に立つように願っています。

２００９年３月

「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン２００８ 事務局

目 次

I. 「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2008総括

1. 「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2008実行委員長から経過報告(発表会より) 3
2. 「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2008地域活動推薦委員長から総括(発表会より) 4
3. 全応募者への応援メッセージ 5

II. 「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2008へ全国から寄せられた活動一覧

1. 全国から寄せられた地域活動 応募一覧 13
2. 各地域報告の情報データベース(町づくりキャンペーンホームページ)の紹介 16
3. 「町づくり2008モデル」一覧 17
4. 「町づくり2008モデル」
 - 活動報告(1)「仲間と共に、若年認知症をイキイキと！」 19
若年認知症グループ どんどん(神奈川県川崎市)
 - 活動報告(2)「公立中学校の空き教室・花壇を住民と中学生が協働作業を通して認知症を正しく理解する」 33
社会福祉法人 リデルライトホーム(熊本県熊本市)
 - 活動報告(3)「認知症メモリーウオーク・千葉」 49
第2回 認知症メモリーウオーク・千葉実行委員会(千葉県)
 - 活動報告(4)「目黒たけのこ流・認知症ネットワーキング」 63
目黒認知症家族会 たけのこ(東京都目黒区)
 - 活動報告(5)「親父パーティーが地域を変える！～認知症地域資源ネットワーク『NICE!藤井寺』の構築～」 77
社会福祉法人 藤井寺市社会福祉協議会(大阪府藤井寺市)
 - 活動報告(6)「であう・ふれあう・わかちあう 認知症の人の見守り支援『あんしんメイト』」 89
NPO法人 認知症サポートわかやま(和歌山県和歌山市)
 - 活動報告(7)「地域と共に歩む老人ホームを目指して」 105
社会福祉法人 ゆうなの会 特別養護老人ホーム大名(沖縄県那覇市)
5. 各地域活動概要 113

III. 資料編

1. 実施要領 179
2. 推薦基準 183
3. 発表会について 185
- 附:活動経過 187

4. 町づくり2008モデル 活動報告(1)

活動名称	仲間と共に、若年認知症をイキイキと！
活動要旨	若年認知症当事者・家族の思いを共有し、社会参加につながる場を生み出すべくサロン活動、家族懇談、自主製作・販売活動、啓発活動を展開。当事者の「役に立ちたい」の声を生かした活動を若年認知症の地域支援ネットワークへ発展させるべく活動。
応募者	若年認知症グループ どんどん 代表 中川 和子
連絡先	〒215-0018 神奈川県川崎市麻生区王禅寺東 2-38-8

1) 推薦理由

- ・ 若年であればあるほど「働きたい」という気持ちが強いことをしっかりと受けとめ、創作活動から生まれたものを商品化している。自主制作のTシャツやせっけんの地域イベント等での販売を通じて、社会参加意識の醸成がなされ、確実に輪が広がっている。
- ・ 若年性認知症ならではの課題に対する本人、家族などの当事者主体の活動をサポーターが支えており、若年性認知症の人たちがいきいきと暮らすための指針になる活動である。
- ・ 何もないところから創意工夫でつくりあげていく力はすばらしく、本人を真ん中に据えた先駆的な取り組みであり、認知症介護の隙間となっている若年性認知症の人への取り組みモデルとして広がってほしい。

2) 3月7日キャンペーン発表会 <インタビュー抜粋>

※町づくりキャンペーン 2008 地域活動推薦委員の町永俊雄さん(NHKキャスター)にインタビューいただきました。

町永◆「どんどん」という名前はなぜつけたのでしょうか。

中川◆病気を告知されて落ち込む家族、本人が多いのですが、うちに閉じこもらず、どんどん町に出て、どんどん仲間をつくり、どんどん病気のことを知ってもらおうという前向きの気持ちを表現した名前です。

町永◆家族会はとても大事ですね。

中川◆経験したことを伝えてくれますし、気持ちをわちあえますし、高齢者ではない悩み、口に出したいけれど受け入れてもらえないし気持ち、いってもわかってもらえないところで、家族会のつながりはとても大事です。

<副代表の井上夫妻が登場>

町永◆どんどんでは遊ぶ、飲むというのがありますが、それだけ大変だからでしょうね。

井上(妻)◆そうですね。もやもやしたものがいつもあって、それが月1回のみなさんの集まりで癒されています。今日明日あさってと、またやっという力をいつももらっています。自分がパニックに陥ってだれに話していいかわからないときに、当事者同士、家族同士の話が一番助かりました。



町永◆井上富雄さんもいろいろな活動をされていますが、料理が得意そうですね。

井上(夫)◆ぎょうざをつくります。おいしいです。

町永◆このTシャツは、富雄さんの笑顔といっしょですね。富雄さんは副代表そうですね。

中川◆はい、いろいろな啓発活動に参加してもらっています。ご意見もいただいています。富雄さん、どこにいらしても、ここにこされているのでみなさんが癒されています。

3)3月7日キャンペーン発表会 <発表資料>

若年認知症グループ どんどん

遊んで飲みます！
おじさん・お婆さん
2006.07～2009.01

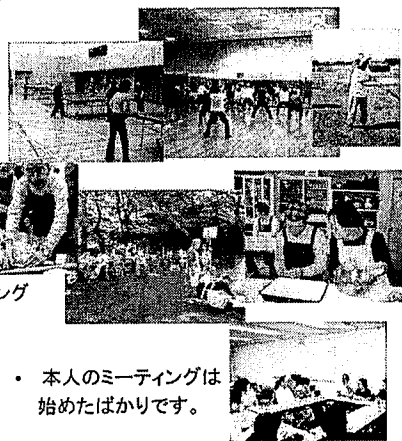


2006.7.25 発足

- ・川崎市認知症ネットワーク(市内各区の家族会とボランティア団体の連絡会)の自主活動として、この日スタートしました。
- ・月に1回、第4火曜日が活動日。
決まった活動場所はなく、
あるときは体育館、あるときはビール工場、
といろいろなところで遊びます。
- ・川崎市の人だけでなく、東京など周辺地域からの参加もあります。

活動風景

- ・若いのでスポーツが人気です。
- ・慣れないこともいろいろやります。
- ・毎回家族ミーティングがあります。



- ・本人のミーティングは始めたばかりです。

飲み会

- ・実は「どんどん」の目玉は二次会です。



- ・野外でも忘年会でもセツセと飲んで食べます。



- ・安いところを探すのはサポーターの重要な任務です。

旅行

- ・ときどきバスハイクに行きます。



- ・Tシャツを売って「豪華温泉一泊旅行」を実現しました。

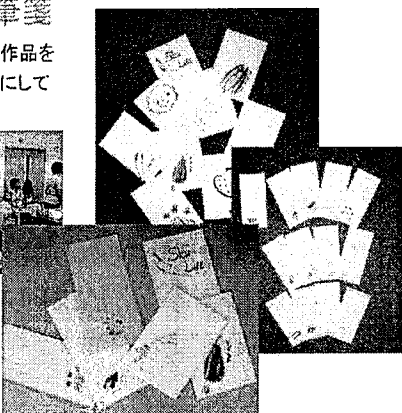
Don't Worry Tシャツ

- ・600枚以上も買っていました。今も販売しております。



ハガキと一筆箋

- ・絵手紙教室での作品をハガキと一筆箋にして売っています。



販売活動

- ・いろいろなイベントに参加して売っています。これからもいろいろな商品を開発したいと考えています。



4) キャンペーン応募資料(全)

1. 概 要

「若年認知症グループどんどん」は、若年認知症当事者・家族の思いを共有し、ホッとできて社会参加にもつながる場を生み出すべく、2006年7月に川崎市認知症ネットワークを母体として発足しました。きっかけは2004年の国際アルツハイマー病協会京都国際会議でした。若く元気なのに役割を失い、働きたいのに働けない、子どもの学資や住宅ローンを抱えて経済的にも厳しい、介護保険制度では「認知症なのだから」と高齢者と同じに扱われ、障害者支援制度からは「進行性の病気だから」と別扱いされ、居場所も適切な支援もほとんどない状況にある当事者・家族を、少しでも支える活動が必要だと考えたからです。現在川崎全域を対象に以下のような活動をしています。

① サロン活動

毎月1回定例で集まり、川崎市内のさまざまな施設を利用して、ボーリング・卓球などのスポーツやカラオケ・ビデオ鑑賞などのレクリエーション、絵手紙などの創作活動を行っている。また年に数回、特別プログラムとして、バスハイク、野外料理なども実施している。

活動終了後はファミレスなどで二次会を開催。おしゃべりの花を咲かせている。

② 家族懇談

サロン活動と並行して開催し、日ごろの悩みなどを話し合うと共に、介護保険や障害者保健福祉制度についての情報交換を行っている。必要があるときは医療・保健福祉分野の専門職によるアドバイスを受けている。

③ 自主製作・販売活動

当事者たちの「役に立ちたい、働きたい」という意欲にいささかでも応えるべく、昨年より、当事者がデザインしたオリジナル T シャツや絵はがき・一筆箋などを製作。各地の福祉イベントなどを通じて販売している。

④ 啓発活動

家族もサポーターも、講演・講師の依頼には積極的に対応し、地域の福祉専門職等の見学・研修も受け入れている。

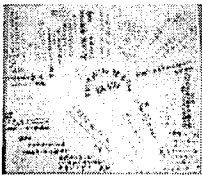
今年度は「若年認知症と向き合うための冊子」づくりをすすめている。「家族の体験」や「当事者の声」の聞き取りを行い、専門職によるアドバイスもまじえて、2009年3月に発行予定である。

自主製作・販売活動は、地域啓発活動としての意味も担っている。この活動を通して得ることができた、他の地域の家族会、福祉専門職、その他多くの人たちの賛同と協力を、若年認知症支援の地域ネットワークへと発展させることが今後の目標である。

「どんどん」のこうした活動への参加は3者共通の楽しみとなっています。特に自主製作・販売活動は、当事者の励みとなり、そのことがまた、家族・サポーターの励みとなっています。またこの活動は活動資金を生み出し、温泉1泊旅行などの夢の実現につながっています。「今度は何をやる？」を考え、話し合うのも楽しいことです

「若年認知症グループどんどん」は、サポーター・当事者・家族が共に支え合う共同体のようなものです。今後も「同じ世代の課題」として若年認知症と向き合い、困難を乗り越える知恵を出し合いながら、絆を深めていきたいと考えています。

若年認知症グループどんどんの歩み

月日	事項	月日	事項
2006年 7月	当事者4名(全員男性)・家族4名・サポーター11名にて出発。 	9月末	温泉1泊旅行実現。 
9月	N夫妻が新たに仲間。	10～11月	さまざまな地域イベントにて販売活動 
2007年 4月	デコパージュせっけんづくり。 I夫妻が新たに仲間となり、女性の当事者が加わる。  	12月	K夫妻が新たに仲間。Y夫妻(70代)がスポット参加の仲間。
		2008年 2月	当事者のYさんが亡くなる。 品川の水族館にはじめてのバスハイク。
5月	デコパージュせっけんを地域のイベントで売ってみる。完売!	2008年 3月	S夫妻が新たに仲間。
6月	マイTシャツづくり。 NM夫妻が新たに仲間となり、N夫妻が引越して抜ける。   	5月	助成金を獲得し、冊子づくりの企画がスタート。
	助成金を獲得し、Tシャツ・絵はがき・一筆箋の自主製作開始。	6月	キリンビール工場へバスハイク。 SK夫妻が新たに仲間。O夫妻(70代)もスポット参加の仲間。 
8月	Tシャツの販売活動開始 ブログ開設 	8月	冊子づくりのための家族への聞き取り開始。 「健康講座」＝はじめての当事者ミーティング。 パソコンにて各々の名刺づくり。
		9月～	この秋も販売活動がんばります!

2. 地域の紹介

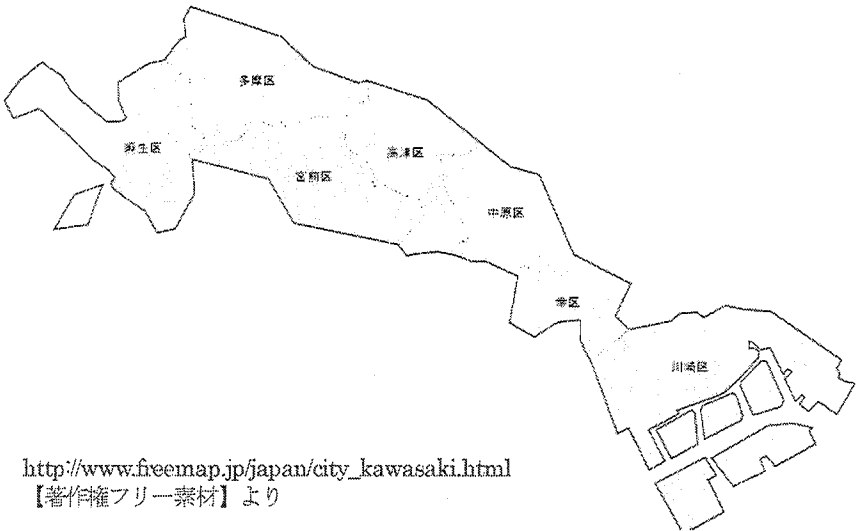
私たちの町川崎市は、人口 1,389,059 人の政令指定都市です（20 年 8 月現在）。

東京都、横浜市に隣接し、南北に流れる多摩川にそって 7 区の行政区が並んでいます。南部が川崎区、幸区、中部が中原区、高津区、北部が宮前区、多摩区、麻生区となります。

南部の臨海地帯は古くから重化学工業地帯として発達し、中部には機械、精密、IT の大企業・中堅企業の研究開発機関などが数多くあります。多摩丘陵の末端に位置する北部は、古くは山林・農業地帯でしたが、

1970 年代以降に宅地として開発され、首都圏のベッドタウンとなっています。

「どんどん」に参加する当事者・家族・サポーターは、この南北に長い都市のほぼ全区から集まっています。



川崎市の高齢者人口は 215,745 人、高齢化率 15.75%で、国の平均 21.8%よりはるかに若い都市です（20 年 4 月現在）。これに対して要介護等認定者数は 33,949 人。全高齢者の 15.13%にあたります。認知症の実数は調査されていないのでわかりませんが、厚生労働省の推計基準の 6.7%とすると川崎市の認知症高齢者は 1.5 万人程度ではないかと推察されます。

川崎市には、認知症の医療面で特筆すべき二つの医療機関があります。一つは、川崎幸クリニック、もう一つは聖マリアンナ医科大学病院です。川崎市の認知症家族はこの二つの病院に支えられて家族会運動を成長させてきました。近年では他の大学病院でも「もの忘れ外来」の開設や認知症早期発見システムの導入など、認知症への取り組みを強化してきています。

また各区には、保健福祉センターの主催する認知症介護教室があります。麻生区が厚労省のモデル事業としてスタートしてから全区で実施。一貫して家族のよりどころとなり、ここから生まれた家族会も少なくありません。

介護保険サービスの整備状況は表のとおりです。特別養護老人ホームなどの入居施設、特に有料老人ホームが多く開設されているのが特徴といえるでしょう。通所介護の事業所では近年、認知症対応型を併設するところが増えてきています。

居宅介護支援	266
訪問介護	234
訪問看護	293
通所介護	151
通所リハビリテーション	24
特定施設入所者生活介護	73
認知症対応型通所介護	29
認知症対応型共同生活介護	45
介護老人福祉施設（特養）	30
介護老人保健施設（老健）	15
介護療養型医療施設	7

では若年認知症ではどうでしょうか。

厚生労働省の研究班が2006年度に群馬県で行った先行調査によると、若年認知症の出現率は18～64歳人口1万人中3.7人でした。これをもとに川崎市の場合を推定すると、若年認知症の方の数は340人程度と思われます。しかしこれらの方々の多くは潜在化してしまっていて、実態はほとんど把握されていません。

介護保険サービスが数多くあるにもかかわらず、若年認知症のニーズを考慮したサービスはほとんどないのが川崎市の現状です。例えばデイサービスの場合、実質的な若年認知症ケア体制を用意している事業所はごくわずかです。そのため高齢者向けのデイサービスを利用することとなるので



幸区の「くじら雲」は「若年認知症の日」を設けており、貴重な専用デイサービスとなっている

すが、「話が合わない」「やることがない」「食事が少ない」などの不満がきかれています。

障害者向けデイサービスの利用をしている人もいますが、症状が進んでくると「対応できない」とされることがあるようです。また他の障害者向け福祉制度の利用もあまり進んでいないようです。

デイサービスを利用せず、家に閉じこもりの人のほうがずっと多いことが想像できます。更に、どこにも相談できないまま苦しんでいる当事者・家族が数多くいると思われます。若年認知症では、情報の不足・サービスの不足・サポートの不足が深刻です。



川崎市認知症ネットワークは年に一度大きな啓発イベントを行う。これはメンバーによる認知症寸劇。

またボランティア同士の口コミで、さまざまな人がサポーターとしてかけつけ、経験と創意を生かしたサポートを提供しています。「どんだん」は地域ボランティア同士の連帯の場ともなっています。

ただし、川崎市はボランティア活動やNPO活動が盛んな地域です。「どんだん」の母体である川崎市認知症ネットワークにも、各区の認知症家族会のほか、地域でミニデイサービス活動などを行っているボランティアグループ、デイサービスやグループホームを開設するNPOが参加しています。これらの人々は「どんだん」を通じて若年認知症への関心を深めてくれています。



「どんだん」サポーターたちの出身母体はいろいろ

3. 活動の内容

1) 発足のきっかけ—それはここから始まった…

2004年10月、第20回国際アルツハイマー病協会国際会議の京都會議が開催され、そこでオーストラリアのクリスティーン・ブライデンさんが、若年認知症の進行途中にありながら、自らの言葉で「認知症の人は心が空っぽだという偏見をなくすよう、皆さんが同士になって」と呼びかけました。それまで認知症は「認知症になったら何もできない、わからない」と周囲からとらえられていたのが、この会議をきっかけに、介護の現場でも当事者の心を聞き、気持ちに添う介護への努力が進むなど、その影響は非常に大きなものでした。

この会議に参加した川崎市認知症ネットワークのメンバーたちも、若年認知症当事者・家族の支援の必要性を強く感じました（川崎市認知症ネットワークは川崎市内約30の認知症関係のボランティア団体、家族会、ワーカーズ、NPO団体で構成され、川崎市の認知症啓発・相談・支援活動を通じ地域に貢献）。

そして、この出来事に強く共感した他のメンバーたちも加えて、その後、相談活動などを通じて出会った若年認知症当事者・家族との交流を開始し、試行錯誤を繰り返しながら、信頼関係を強め、これを土台として2006年7月、「若年認知症グループどんどん」を立ち上げたのです。64歳以下の若年認知症当事者・家族、サポーターが同じ仲間として共に支えあう共同体です。家にこもらずどんどん街に出て楽しもう、どんどん仲間を作り、どんどん病気の理解者を増やそう、という前向きの気持ちを込め名前がつけました。当事者夫妻であるA夫妻にも副代表として運営を担ってもらうことになりました。

2) 若年認知症当事者の抱える様々な困難—共に支えるどんどんの活動

当事者の多くは高齢者とは違う様々な困難を抱えています。

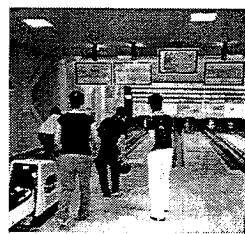
- i 働き盛りで発症した場合退職を余儀なくされ、退職後も社会参加の意欲を強く持っている。
- ii 働き手が発症した時、働けなくなり家族は一挙に経済的困窮に陥る。
- iii 家族、当人がなかなか病気を受け入れられず葛藤し、夫婦間家族間のトラブルもある。そうしたことからうつ状態などに陥りやすい。
- iv 利用できる制度が少ない。

そうしたことをふまえ、私たちは「認知症の進行をできるだけ遅らせ、人生を大切に、自分らしく、イキイキ生きて行くこと」をメンバー共通の目標として掲げました。そしてそのためには当事者の社会参加の促進が必要だと考えたのです。

明日はわが身！ もし認知症になったとしても、特別の目で見られたくないし、排除されたくない。そして困ったことも楽しいことも仲間とわかち合いたい。そうした共通の感覚を手がかりに、「どんどん」の活動内容や方向性が決まっていきました。

① サロン活動

活動日は毎月第4火曜日。時間帯はプログラムによって変わりますが、午後1時半～3時半がコアタイムとなっています。会場は市内の市民館やスポーツセンター、カラオケ店などです。毎月サポーター2名が当番となり、準備、進行、二次会場の手配、報告作業をします。終了後は会場周辺のファミレスなどで二次会（飲み会）に突入です。



ボーリング大会



多摩川ペリでバーベキュー

現在、当事者家族は8組、サポーター約15名。発足当初は4名の当事者だったので、徐々に増えています。当事者のうち7名は男性、1名が女性です。女性の参加が増えてほしいと思います。

当事者の年齢は50歳代が3人、60歳代

が5人です。サポーターもほとんど同年代です。

毎回の総参加者平均は25～6名です。サポーターは地域で認知症関係の家族会、福祉活動をしているボランティア、福祉専門職、介護支援員、ヘルパー職などで、認知症ネットワークのメンバー（有志）以外にも様々な人が関わっています。



絵手紙教室



料理教室

身体の元気な方が多いので、卓球、ボーリングなどのスポーツが好評です。そのほか、料理教室・パソコン教室など「やったことがない」ようなことにもチャレンジしてもらっています。男性当事者も「いやー、料理はやったことがなくて」と言いながらもギョーザ作りに力を発揮したり、料理には参加しなくても、お鍋をきれいに洗い

あげ、周囲を驚かせる方もいます。

普段は家では歌う姿を見たことないという家族の話とは裏腹に、毎回、素晴らしい喉（詩吟）を披露してくださる方もいます。

川崎市の福祉バスを利用した年2回のバスハイクもあります。2008年2月には品川アクアスタジアム、6月には麒麟横浜ビアビレッジへ行きました。

昨年の1周年記念研修旅行では、箱根の温泉に行き、1泊2日を楽しく過ごしました。家族だけでは行けない所に行けたと喜ばれました（男性サポーターは入浴介助が大変だったようですが）。

外出レクの場合は、当事者にサポーターがマンツーマン以上で対応し、事故のないよう配慮しています。よほど必要でない限りは、基本的に家族とは離れて行動してもらいます。少しの時間でも家族が介護から離れてもらうのと、当事者にも独立した人として行動してもらうためです。サポーターとの信頼関係を築き、仲間意識を持ってもらう意味もあります。当事者のできることに目をやりながら、必要に応じ個別対応をしています。



バスハイク



1 泊温泉旅行

また 2008 年には、初めての試みとして「当事者の健康教室」と称する当事者ミーティングを開催。夫婦のこと、自分の健康のこと、障害に対する気持ちなど率直に語ってもらいました。

2007 度は保健福祉センターと共催の卓球大会を企画し、啓発の一環となりましたし、2008 年度には介護保険事業所の方や、地域包括支援センター職員、取材関係者、福祉現場の方などの見学参加もありました。今後もぜひ関心を持っていただきたいと思います。飲み会は皆が入り混じり、心置きなく飲んだりしゃべったり。当事者の思わぬ本音が聞けたりするのも二次会ならではの事です。現役時代を思い起こすような交流スタイルです。どの人も笑顔、笑顔。「どんどん」に欠かせないものとなっています。



②家族懇談

当事者がサポーターとプログラムを楽しんでいる間に、別室で開催。日頃の悩み、介護の仕方、制度の情報などを話題に心置きなく話します。毎回、認知症アドバイザーの五島シズ先生にアドバイスをいただいています。家族も、他都市の家族会にも参加したり、役所の窓口に聞きに行ったりと、情報収集と他の家族への情報提供に前向きです。

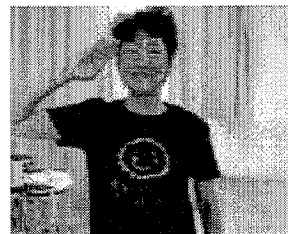
家族も当事者も、このような集まりに参加するまでには大変な葛藤を経験しています、そのため、まだつながっていない人たちに対して「家にこもらないで、外へ一歩踏み出す勇気をもって、ぜひどんどんに参加してほしい」という思いを強く抱いています。

③自主製作・販売活動

●オリジナルTシャツ。

なんと言っても、この活動はこの2年間の中でも大きな位置を占める出来事です。

当事者たちの「働きたい、何かの役に立ちたい」という思いを少しでも実現できればと、外部団体からの助成金で企画したものでした。



マイTシャツづくり

スタートは「マイTシャツづくり」のプログラムでした。当事者と一緒にサポーターもオリジナル絵柄をペイント作業しました。個性豊かな作品の中から、副代表でもある当事者のAさんの作品が選ばれ、「どんどんオリジナルTシャツ」が誕生。お日様マークの絵柄です。そしてどんどんからのメッセージ・ロゴ「don't worry (忘れても失敗しても気にしない! という意味)」をアレンジし、運営資金の確保と当事者たちへの成果の還元も目標にして製作・販売をスタートさせました。

スタートは「マイTシャツづくり」のプログラムでした。当事者と一緒にサポーターもオリジナル絵柄をペイント作業しました。個性豊かな作品の中から、副代表でもある当事者のAさんの作品



自力でシルクスクリーン印刷!

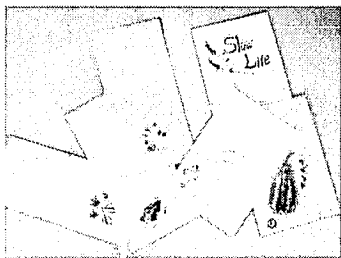


力を合わせて袋詰め

Tシャツ班も結成しました。始めは手作りで後半は業者依頼し、サポーター・当事者・家族が一緒になって袋詰め作業やシール貼り、販売をしました。地域の福祉イベントにも出かけていきました。趣旨を理解して下さった多くの方たちから注文が入り、当初予定枚数をはるかに上回る売り上げを記録しています。

お日様マークはその後、川崎市認知症ネットワークの啓発シンボルマークとして採用され、イベント用のハッピーやのぼりに使われています。

●一筆箋と絵葉書。



絵葉書と一筆箋

また、絵手紙教室で生まれた当事者の全員の作品を、一筆箋、絵葉書にして販売しました。収益を、当事者にはデザイン料として還元。また1泊旅行の補助や運営に回し、家族、サポーターの負担も減らすことができ、さらには当事者にとっての励みとなりました。そして、販売を通じて、地域の家族会や諸団体とのつながりを広げるきっかけとなり、若年認知症への理解を進めることにもつながっています。

自主製作・販売活動は、月1回の活動だけでは当事者の仕事として確立するにはほど遠いのですが、折々のプログラムと関連させながらゆっくりやっています。



地域イベントで販売

④啓発活動

●自主製作・販売活動が啓発活動としても成果をあげてきたのは前述のとおりです。

●家族が講師に。

「どんどん」発足以降、若年認知症をテーマとしたシンポジウムや勉強会が各地で開かれるようになり、「どんどん」の家族に講師の依頼が来ることが多くなりました。自分の家族生活を話すのですから抵抗感もありますが、家族は、こうした依頼にはできるだけ応えるようにしています。そうして、未だ孤立したままで葛藤している家族に、若年認知症との向き合い方を伝えようとしています。

●若年認知症に向き合うための冊子作り。

次に続く当事者・家族の手がかりや支えになればと、地域のNPO法人からの助成金を得て、家族の体験・当事者の声を集めた冊子づくりにとりかかっています。2008年度末を目標に完成させ、行政・医療・福祉関係機関の窓口に置かせていただくなどして、当事者・家族はもちろん、福祉現場に働く人、一般市民の人にも読んでもらいたいと思っています。

4. 活動の成果と今後の展望

1) 成果

サロン活動については、当事者・家族の要望を生かしながら、さまざまなプログラムに取り組み、大きな楽しみと連帯感を生んでできました。介護保険のデイサービスとは異なるダイナミックな活動に「こういうところがあることをもっと早く知っていれば良かった」と言う家族もいます。

家庭では長時間顔を突き合わせ、ついキツイ言い方をしたり、悶々として過ごしていたりする夫婦も、外の世界に関わることで表情がいきいきしてくると感じられます。サポーターも場面ごとに、当事者の「できることできないこと」を察知し、サポートしています。家族も知らない当人の力を、ここにすれば発揮できています。

ただ、若年認知症では病気の進行が早い場合もあり、症状が進んでくると個別対応することが多くなります。ですが、どうしても周囲の話を受け入れず、マイペースを崩そうとしない方でも、なじみの顔に出会ったときには笑顔になり、時折ちょこっと馴染みのある歌に参加したりすることができています。そういう方でも二次会は楽しみにしておられるようです。

家族も時にはサポーターになります。手作りのグループなればこそ、きめ細かな対応ができるのだと思います。

家族懇談は介護者としての悩みを共有できる機会です。毎回たくさんの悩みや情報が飛び交います。以前取材に来られた方が、懇談を聞いて「ずいぶん明るいですね」と驚かれていました。抱える状況の深刻さがあっても、安心して何でも話し合える、泣きもすれば笑いもある、という信頼感があるゆえのことです。家族同士で連絡取り合ったり、交流することも出てきました。また、家族の立場での講演や講師依頼もあり、発表するなかで家族としての力をつけてきています。講師による専門的アドバイスがあることも安心につながっています。

Tシャツ、絵葉書、一筆箋、石鹸デコパージュ、の製作・販売は、今では会の重要な資金源です。昨年ほどの爆発的な売れ行きではありませんが、いろいろな機会をとらえては、啓発も兼ねた販売を地道に継続しています。会の活動を外部団体の広報や介護雑誌で紹介してもらう機会も増えました。地域のある団体から「高齢者の希望で自分の会の10周年記念品にTシャツを配りたい」とか地域の認知症の家族会から「20周年の記念品として一筆箋をほしい」あるいはワーカーズやボランティア団体、地域の体操教室からは「ユニフォームにほしい」といった希望が入ります。当事者デザインのお日様マークがとてもほのぼのとしていると好評で、これからもいろいろなところに広がっていきそうです。

地域の福祉イベントなどでの販売も、当事者・家族が1日ばかりで参加しました。活動費として後日気持ちばかり還元することができました。自分たちが関わったものが売れて会の運営資金になるということが、ささやかな成果ですが、当事者の励みとなっています。

2) 今後の展望

これから生活していくにあたり、

- ・高齢者と比べて若年認知症の絶対数が少ないので、介護保険サービスで専用サービスを実施する事業所がないに等しい。しかも障害関係の制度も含め、支援制度全般に若年認知症当事者・家族が活用できるものが少なく、社会的支援体制が不十分。
- ・ローンを抱えた家族にとって、サポートなしでは行動できない当事者であっても、身体が元気という理由で重度障害と認められず、住宅ローン免除が適用されない。

といった若年特有の課題への取り組みが必要です。地域の福祉専門職との連携を図っていくと同時に、行政への効果的な働きかけの方策を考えていきたいと思います。

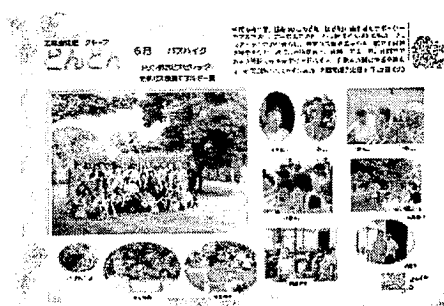
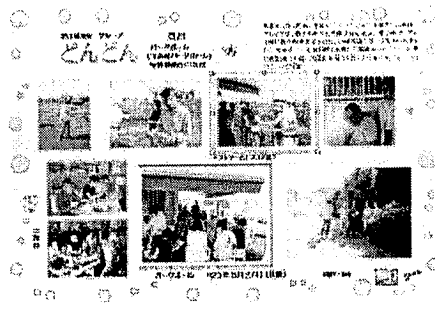
また会の内側の問題として、

- ・若年認知症は進行が早い人もいるので、個々の状況に応じたプログラムの開発や、移送ボランティアなどの外部支援を組み合わせるなど、対応の工夫が必要。
- ・いつでも好きな時に使えるような固定した活動拠点場所がない。
- ・活動日を増やすことも考えられるが、サポーターはそれぞれの地域で別の活動を抱えていたり、専門職として働いていたりするため、サポーターの大幅増強がない限り不可能。
- ・毎年の活動資金が不確定。

等の悩みがあります。

私たちの活動が若年認知症の当事者・家族のためにどれほどの力となるかわかりませんが、今後も新たな当事者・家族の掘り起こしをしながら、安心して過ごせる場づくり、仲間関係づくり、認知症になっても安心して住める町づくり、のための活動を、これからも続けて行きたいと思います。そしてこれからもどんどんは、「どんどん進化するグループ」でありたいと願っています。

どんどん写真通信 (2008. 4～7 月号)



[illegible]

フォーラム後半では、第3年認知症について話し合いました。第3年認知症は、65歳未満で発症する認知症です。働き盛りで発症し、退職せざるを得なくなる人も多く、「生きがい」「働きがい」を提供する方、大きな課題になっています。

井上 かつ子さんの奥も、昭和30知症です。井上さんは、ほかの昭和30知症の人や家族と交えあおうと、グループ「どんどん」を立ち上げました。

井上さんは、「どんどんでは、『シャツ』を作って皆さんに買ってもらっています。売り上げで少し金儲けを足して、みんなで旅行にも行きました。若年認知症の方も、どんどん外に出て行こうということで『どんどん』と付けました。Tシャツのマークは夫が作りました。出来ることをやってみよう



当事者ミーティング



活動報告(2)

活動名称	公立中学校の空き教室・花壇を住民（認知症者を含む）と中学生が協働作業を通して認知症を正しく理解する
活動要旨	中学校に隣接した空き家に小規模多機能型居宅介護事業所を開設し、認知症支援の啓発や、地域の防犯・防災に貢献。学校は勉学だけでなく「人間力を培う場所」でもあり、地域住民にとって「開かれた公的な空間」であるなどの成果が生まれている。
応募者	社会福祉法人 リデルライトホーム 総合施設長 小仲 邦生
連絡先	〒860-0862 熊本県熊本市黒髪5-23-1

1)推薦理由

- ・ 事業実施委員会において、行政・PTA・民生委員・自治会・中学校長など、地域に携わる多くの住民が参加し、地域に根ざした活動が行われている。
- ・ 地域の人たちの意識を変えていくために、まず実態を把握し、進むべき道筋を示していく取り組み方がすばらしい。こうした地道な取り組みや方法が地域を変えていく力となり、今後の積み重ねに期待できる。
- ・ 学校行事などに認知症の人が参加することで、中学生だけでなく、その保護者や教職員に対しての啓発効果・理解の普及にもつながっている活動であり、他の地域でもぜひ参考にしてほしい。

2)3月7日キャンペーン発表会 <インタビュー抜粋>

町永◆中学生とともに考えよう、と若いターゲットに絞ったのは、どういう思いがあったのでしょうか。

小仲◆未来を担う人に正しく認知症のことを理解してもらいたいという思いです。中学生のお父さんお母さんは40、50歳代が多く、そのおじいさんおばあさんが認知症になる世代です。種をまくことが大事だと思います。

町永◆運動会に認知症の高齢者を招いてもらったそうですが、どういう感じでしたか。

小仲◆楽しかったですね。私も出たかったのですが、声がかからず(笑)外でみていたのですが、来年度つまり、今年の秋からは定例的にプログラムに入れてくださるそうです。とても感謝しています。

町永◆中学生は準備もとても一所懸命ですね。

小仲◆前日や2日前から施設にきて、「私があなたとペアを組む〇〇です」と自己紹介してくれます。

町永◆まさに「認知症を理解する」ではなく、「その人を理解する」という活動ですね。

小仲◆そうだと思います。



4) キャンペーン応募資料(全)

1. 概 要

平成 19 年 3 月、社会福祉法人リデルライトホームは法人本部と同じ生活圏域内の熊本市立桜山中学校の隣接地に小規模多機能型居宅介護事業所「コムーネ黒髪」を開設しました。空き家となつて 10 年以上の建物は、以前熊大生に貸間として使っていたことから洗面・トイレの設置箇所が多く小規模多機能型居宅介護事業にはうってつけの建物でした。近隣住民・自治会関係者は“防犯上”からこの家屋を当法人が借用し、“認知症高齢者”の施設として活用する、という説明に対し両手をあげ賛同していただいた。

このことは以下のようにまとめることができるのではないかと。

① 認知症の支援施設の啓発機会になった

② 地域の防犯・防災という点から社会福祉法人としての貢献ができた

本活動は、「コムーネ黒髪」が位置する黒髪四町内(※(2)地域の紹介参照)に絞込み、そこを利用する、認知症の人々と町内住民＝顔見知りの人々が、中学生と協働して、花壇の草を取り、花や野菜を植え・育てそして収穫する、という一連の関わりをもつことにより

①認知症を正しく理解する

②学校は勉学だけではなく、(地域の人々との関係を通して)人間力を培う場所でもある

③学校は、地域住民にとって「開かれた公的空間」である

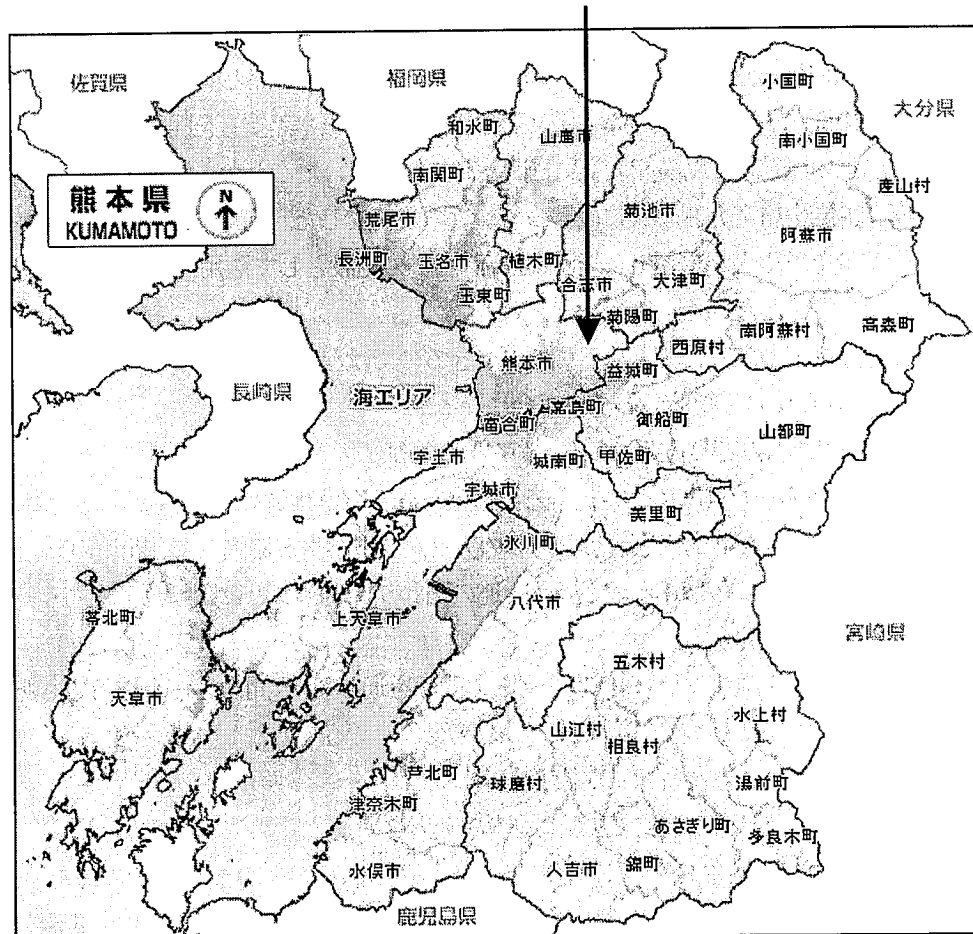
等々の成果物を得ることを目標に別紙(※年間スケジュール参照)に沿って活動して参りました。今後も校区の住民と一緒にこの活動を推し進めていきたいと思ひます。

本活動は、平成 20 年(2008 年)4 月から具体化しましたが、約 20 年前にその源を探ることができます。「地域の力を引き出した保健活動」(1997 年 6 月、保健婦雑誌 Vol 53 No. 6 p454-462)の末尾には、「現在、ボランティアを中心に“支え合う地域”をめざし、次世代を含む住民の協力参加に向けて生き生きと活動が展開されている。～中略～この活動は、ボランティアとそのサポートを受ける高齢者の生きがいや病気の予防、ひいては寝たきりや痴呆(現認知症)の予防につながる活動といえる。この活動で健康情報や福祉サービスが住民の身近なものとして活用されるよう働きかけることは大切である。」と記されています。

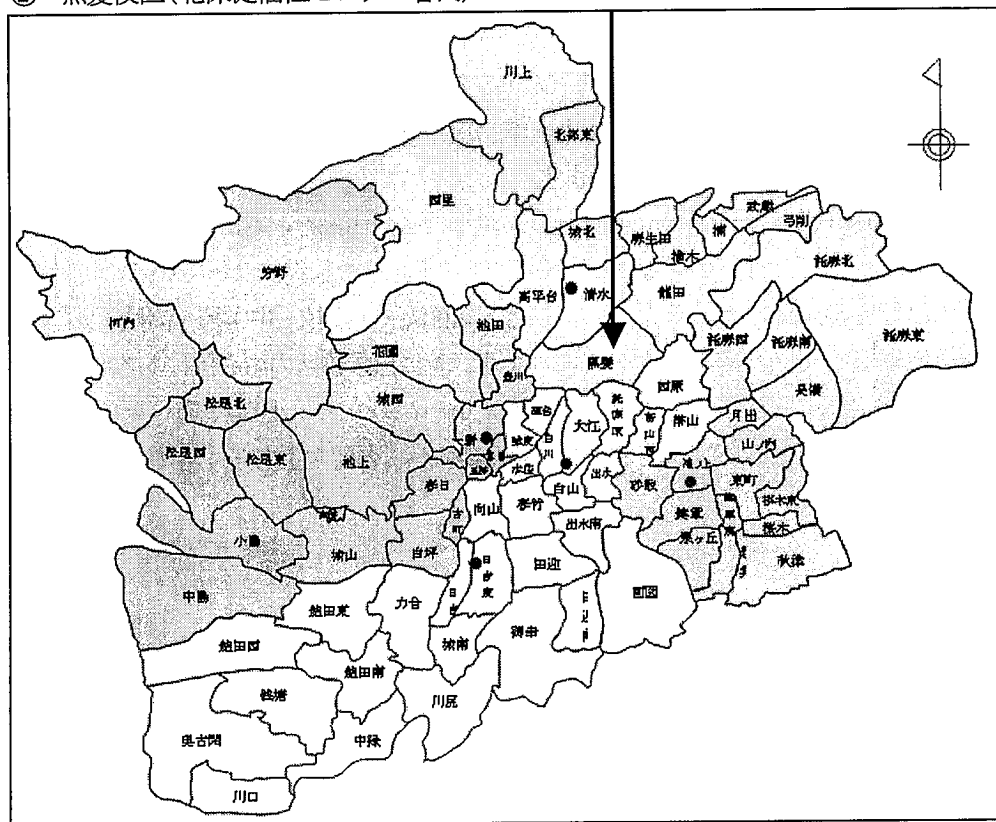
昭和 50 年代からの熊本市の保健活動が黒髪校区の住民とともに“種をまき・花を咲かせ”てきたことが今日の黒髪校区の住民風土(支え合いの関係)の基礎になっているのではないかと思います。文教地区といわれてきた黒髪校区には、幼稚園・小学校・中学校・高校・大学及び附属特別支援学校(旧熊本大学附属養護学校)があります。特に黒髪校区の中心部にある熊本大学(旧制五高)は、数多くの著名人を輩出しています。ラフカディオハーン(小泉八雲)・夏目漱石が教鞭をとっていたことはあまりにも有名です。今日、世界各国からの留学生も多く町内で日常的に外国人を目にする地域でもあります。

※年間スケジュールは、p. 44 に添付

活動のエリア紹介① 熊本県熊本市



活動のエリア② 黒髪校区(北保健福祉センター管内)



2. 地域の紹介

熊本市北保健福祉センター管内 校区別年齢分布統計及び熊本市統計(08, 1 発表)によれば
学生が多く一見若者の多い町のように見えますが、年少人口は熊本市内で最も低く反対に高齢
化率は最も高い、というのが管内のプロフィールです(資料①②)

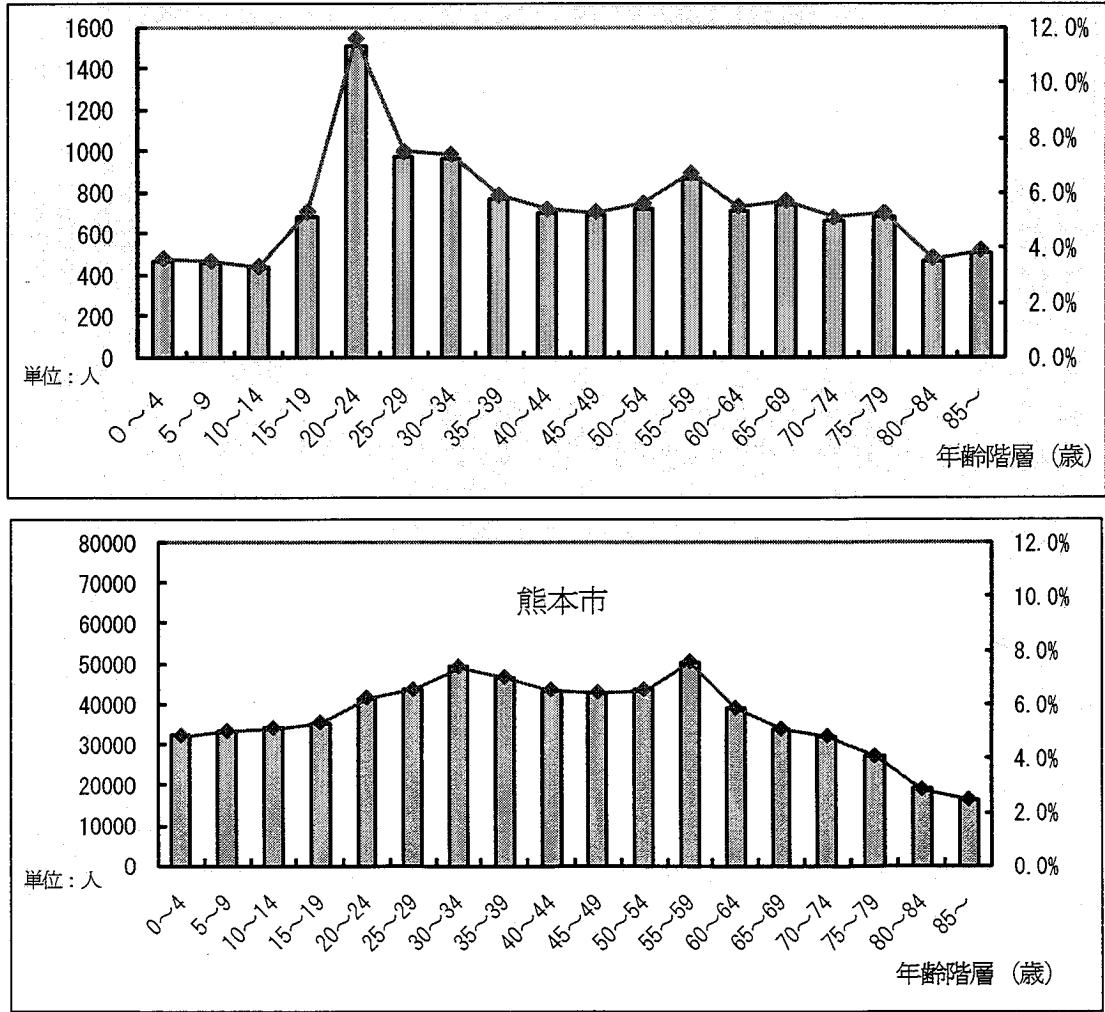
資料①

	熊本市	黒髪校区	市に占める割合
総人口 (A)	664, 256 人	13, 055 人	1. 97%
6 5 歳以上人口 (B)	128, 794 人	3, 072 人	2. 39%
高齢化率 (B/A=%)	19. 3%	23. 5%	80 校区中 5 番目の高位
介護認定者数	23, 609 人	669 人	2. 39%
介護認定率 (%)	18. 3%	21. 8%	80 校区中 7 番目の高位
年少(0~14 歳)人口 (C)	99, 848 人	1, 360 人	
年少比率 (C/A=%)	15. 0%	10. 4%	80 校区中 75 番目の低位

資料：熊本市保健統計

08. 1

資料② 年齢階層別人口分布



高齢化率・介護認定率は、熊本市80校区の中でも上位にあります。特に後期高齢者の割合、高齢者世帯、1人暮らし高齢者の数が最も多く、年間1～2人の孤独死が発生しています。

高齢化率の高さは認知症出現の頻度と相関関係にあり家族による支援や介護保険サービスだけでは対応しきれない状況になっていることが圏域の地域包括支援センターの報告にもあります。

校区住民の高齢化は、これまで培ってきた住民相互の“支え合い”活動が自然消滅するのではないか、という危機感が今活動のきっかけであり、推進力ではないかと思います。

3. 活動の内容

<アンケート調査>

①中学生を対象

目的：現在の桜山中学校の生徒が、認知症に対し、どのようなイメージや、認識を抱いているのかを把握し、今後の学習会や、地域交流および事業実施委員会の基本情報とする。

実施日：平成20年6月13日（金）8時30分～8時40分

手法：ホームルームの時間に各クラスにおいて記入し回収した。

有効回答数：全学年195名（10名は無回答・欠席者は除く）

②地域住民を対象

目的：コムネ黒髪が開設し、1年が経過しコムネ周辺の地域住民が認知症に対する認識やイメージが、いかに変化したのかを把握すると共に、本事業を通して、隣接する桜山中学校との連携の手がかりを調査する。加えて、地域住民の認知症を含めた今後の生活に対する想いや不安を抽出し、本事業の取り組みの資料とする。

実施日：平成20年6月30日（月）～平成20年7月4日（金）

手法：対象となる住民宅へ訪問し、調査表を渡し、後日回収。

有効回答数：コムネ黒髪が所在する周辺22世帯（34世帯の内、4件が拒否、8件が空き家）

③中学生・保護者を対象

目的：認知症サポーター養成講座を受講していただいた保護者の方々に、認知症に対する意識の変化を把握し、今後の講座へ反映させる資料とする。

実施日：平成20年8月25日（月）19:50～20:00

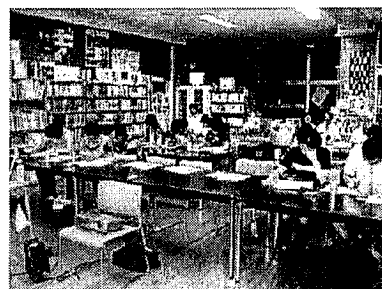
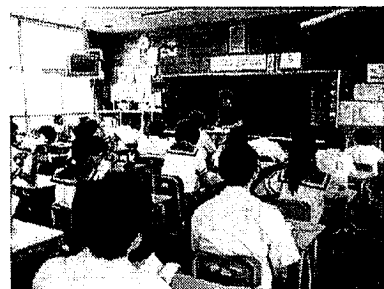
手法：認知症サポーター養成講座後に実施。

有効回答数：15名

<認知症サポーター養成講座>

講座は全部で下記の日程で5回行われました。

- | | |
|---------------------|-------------------|
| ① 08年7月8日(火)14:10～ | 桜山中学校一学年・教職員 67名 |
| ② 08年7月11日(金)13:50～ | 桜山中学校三学年・教職員 69名 |
| ③ 08年7月15日(火)13:50～ | 桜山中学校二学年・教職員 76名 |
| ④ 08年8月25日(月)19:00～ | 桜山中学校保護者・地域住民 27名 |
| ⑤ 08年9月5日(金)19:00～ | 地域住民 60名 |

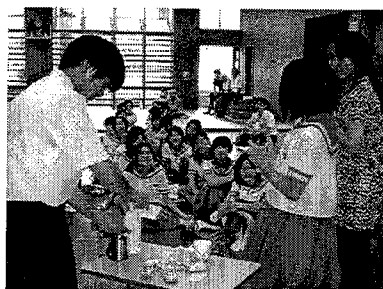


初回開催時、熊本市高齢介護福祉課の石原課長より開催に際し「熊本市では今年度認知症サポーター養成講座を開催することになり、本講座が市内最初の講座となります。中学生の皆様が認知症を正しく理解し、生活していращやる自宅での生活をずっと、ずっと継続できるように支えて下さい。そのような学びが講座の中から得られますよう願っています」と挨拶がありました。

講師は、熊本県認知症キャラバンメイト(小規模多機能型居宅介護事業所「コムーネ黒髪」管理者)の松永佳子さんは、認知症を正しく理解してもらうために、いろいろな工夫をしていました。クラスメイトが実際に、認知症の人への対応方法等の体験を目の当たりにし、認知症サポーターとして、どのようなことをすれば良いのかを学んだのではないかと思います。

本活動の特徴として、キャラバンメイトだけでなく同じ校区に住み、実際に認知症の方を介護されているご家族(林 敦子様・橋本智徳様)に講演していただきました。認知症に至るまでの症状や、介護の大変さ、または楽しさなどを、介護者の立場からお話して頂きました。

最後に、受講した中学生、及び先生方にオレンジリングを配布しました。女の子からは可愛いという声や、すぐに腕にはめて、皆と見せ合う姿が新鮮でした。受講した皆さんからは感想文をいただき未来の地域を担う若者としての暖かいメッセージをいただきました。新聞やテレビの取材・報道を通して県民の皆様方にこの講座の目的や理念が広報できました。以後成果は子供たちに、保護者の方達に浸透していきつつあることが住民の皆様から報告されています。



9月5日に開催しました地域住民を対象とした講座には、自治会長・郵便局長・コムーネ黒髪利用者家族・民生委員・老人会等、60名近くの方々が夕餉の時間帯であるにもかかわらずお出でいただきました。キャラバンメイトの講義の後、小規模多機能居宅介護事業所「コムーネ黒髪」利用者家族の体験発表には身を乗り出し聞き入る姿に主催者として、満足感がありました。

講座終了後、初企画として「高齢者疑似体験装具 浦島太郎」を数人が装着し、高齢者体験を行なってもらいました。歩行、階段昇降、チラシを見る、などを楽しく行なっていただきました。町内の郵便局長さんから、「大変貴重な体験をした、郵便局を利用するお年寄りの皆さんに対してこれからは関り方が変わると思います」とお話しいただきました。



＜中学生とのふれあい＞

本活動では、「座学」で高齢者や認知症に関する知識を深めることにとどまらず、認知症の方々と触れ合える機会をより多く設けることに主眼をおいています。これまで

- ①5月17日、コムーネ黒髪の高齢者との交流
- ②5月18日、桜山中学校の運動会への参加
- ③5月21日、空き花壇の協働耕作とさつま芋植え
- ④7月16日、特別養護老人ホーム入居者との交流
- ⑤7月24日、ふれあいフェスティバル参加
- ⑥8月9日、桜山中60周年企画参加



9月9日、中学3年生「総合学習」の時間に高齢者の身体状態を体験する為に、高齢者疑似装具を装着し、様々な動作を行ってもらいました。緑内障を体験の為にゴーグルを装着したまま、数学の授業やボール遊び、階段昇降、お箸で豆はさみ、卓球等に挑戦してもらいました。



中学生は動作の大変さに汗を流し、高齢者に対する理解を深める機会となりました。装具装着後の辛さ、暑さにも負けず歓声をあげながらの体験は思い出に残るイベントになったのではないかと思います。友人への声かけやいたわり、励まし等教室では学べないことがらを多く学んだことが感想文の中に記されていました。

10月には、春に植えた“さつま芋”などの野菜を住民の皆さんと収穫します。その野菜を使い、11月中旬の日曜に大収穫祭を実施する予定です。ひとり暮らしの方達にも楽しいひと時を提供できればと、中国から熊本大学に留学中の学生さん方、食改善員の皆様と共に“大餃子づくり”大会を企画しています。校区に居住する住民の皆さん(子供からお年寄りまで)一緒に楽しもう、という企画です。

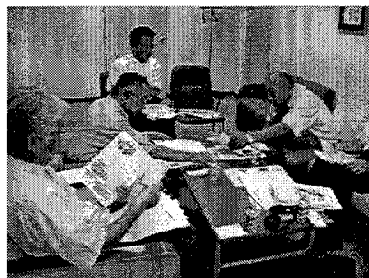
また、10月26日に行なわれる予定の中学校の文化発表会には特別ゲストとしてNHKの町永俊雄アナウンサーをお招きし「認知症になっても大丈夫 そんな町 “黒髪を”」と題した講演会、31日には、大阪市立大学の三浦 研准教授による“出前講義”を通して、「長寿を誇れるまちを創る～私達に課せられた宿題～」と題して住民の皆様とともに考えていくことにしています。また、活動の総まとめとして、平成21年1月24日中学校の体育館においてシンポジウムを開催する予定です。「住民が 住民のために どのように支えあえばいいか」を考え、実践していく契機になることを期待しています。この活動の特徴として、企画が全て町内で行なわれることに大きな意味があります。

<先進地視察>

認知症の方々を支える街づくり活動をされている先進地を視察・訪問し、活動されている行政機関や、地域住民の方々、協力機関の方々から話を聞き、住民への理解の経緯手法、サービス（実施）までの過程、問題点や、今後の展望（事業具体化）等についてお話を伺い活動の参考とさせていただくことを目的に実施致しました。訪問先は、『「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2007 報告書』等を参考に、下記の日程で訪問させていただき関係者のご努力の過程を伺うことができました。

- ① 東京都昭島市「都立拝島高校生の活動」 日時：平成20年7月14日～15日
- ② 福岡県大牟田市「はやめ人情ネットワーク」 日時：平成20年7月15日
- ③ 大分県中津市「沖代すずめの活動」 日時：平成20年8月4日
- ④ 京都府長岡京市「やすらぎ支援員活動」 日時：平成20年8月28日～29日
- ⑤ 神奈川県足柄上郡開成町「町社協の先駆的取り組み」 日時：平成20年9月4日～5日
- ⑥ 大阪府大阪市淀川区「生活屋の実践」、城東区「蒲生の家の取り組み」

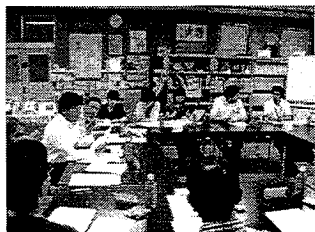
日時：平成20年9月8日～9日



<事業実施委員会>

活動を円滑に進めていくために、大学の准教授を実施委員長にお願いし、市や県の認知症対策担当職員、桜山中PTA会長、校区民生員、自治会長、中学校教頭、校長、地域の福祉施設代表者等、対象エリアの関係者による委員会を構成しました。委員会は、毎月下旬に定例開催し進捗状況報告や、予定等に対し意見交換を行ないます。黒髪校区の様々な職種、立場の委員から事務局から出された活動案を様々な視点から討議していただきますので内容が深められ、濃いものになっていきます。事務局は活動後の内容を（翌月の）委員会において資料やパワーポイントを使用し報告し、委員会で浮上した課題や反省点、改善点などを毎週事務局において検証し以後の活動に生かすよう心がけています。校区に関連する方々が集まる場を定期的にする事で、本活動がより地域に根付いた活動になっていくのではないかと思います。

“支えあいのある校区”づくりは日々住民の皆さんと「顔なじみ」になり「会話」のある黒髪校区にしていくことであることが大切であると思います。町づくりの基礎となる委員会活動は今後も毎月実施していくことにしています。



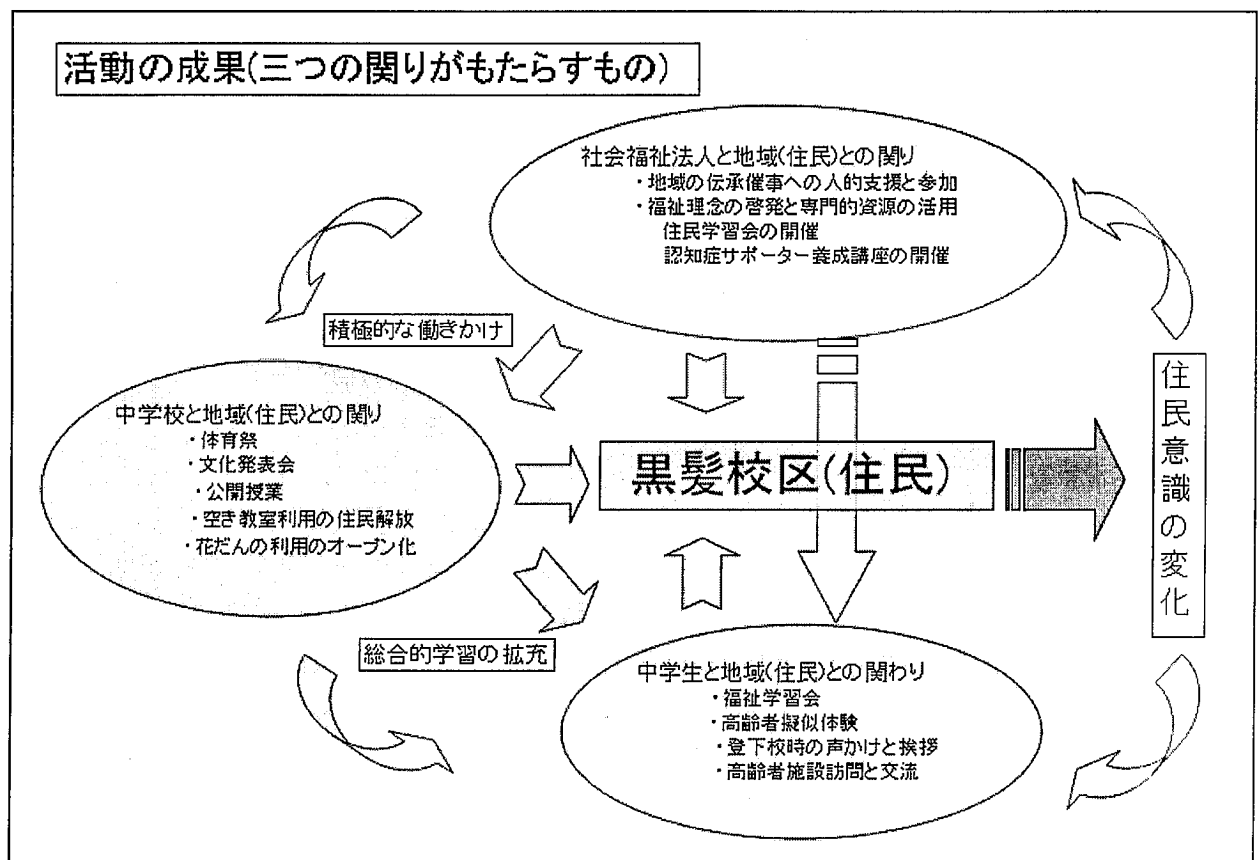
4. 活動の成果と今後の展望

① 活動の成果

本活動は、地域(黒髪校区住民)に対し①社会福祉法人と地域(住民)との関り②中学校と地域(住民)との関り③中学生と地域(住民)との関り、という三つの柱を立てました。この活動を通して①中学校の地域(住民)のオープン化②社会福祉法人の運営する施設の一層のオープン化③住民の認知症介護に対する理解の促進、といった成果が少しずつですが表れつつあります。

住民は、町内に住む“支援を要する人々”の見守りや家族に対し側面的に支援していく」ことの重要性に気づくきっかけになりつつあります。町内の(中学校に隣接する)認知症高齢者の地域密着型施設である小規模多機能居宅介護「コムーネ黒髪」の利用者への理解は、(認知症サポーター養成講座や地域学習会の学びによって)いっそう深まったように思います。

中学生の意識変化も地域住民以上です。子供たちの変化は教職員の変化にそして、保護者の変化へ、と連鎖していきつつあります。中学校の変化、中学生の変化は当然地域(住民)の変化になります。意図したものではありませんが、「公」に期待するのではなく「住民自身」が創造していくことの重要性を認識しつつあることは本活動の目指す方向に沿ったものといえます。活動の様子が新聞やテレビで報道されていく毎に住民の話題が認知症になっていきました。自治会の役員の女性(70歳代)が「この町内からは認知症を出しません」と笑顔でおっしゃったことは1年前には想像できないことでした。



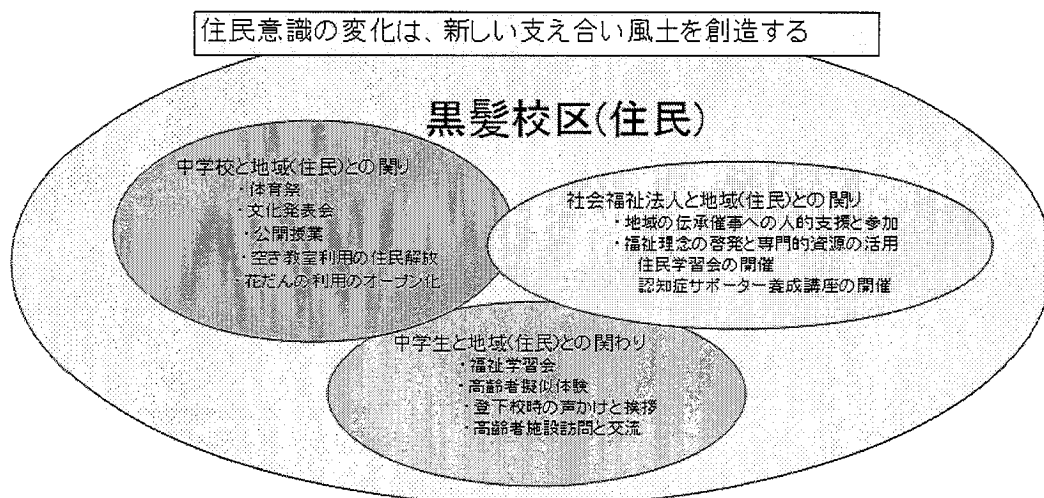
② 今後の展望

住民とりわけ認知症高齢者が、中学校の空き地・空き教室の活用を自由にできることにより、学校が地域の社会資源として付加価値があがるだけでなく、公立中学校でも“介護予防”等のサービスが利用できることは財源、という視点からも成り立つ考えではないでしょうか。具体的なサービス提供システムは本体施設の“ランチ”と位置づけられることでしょう。

社会福祉法人のみが福祉サービス提供主体でなく住民福祉の支援場所として中学校がこの活動を契機に可変することもあり得るのではないかと思います。本年度の活動を土台に次年度は、現在細々と活動しているシルバーヘルパー活動(概要の項参照)の理念を継承し、若い世代の友愛訪問・見守り支援等の活動員の養成をしていきたいと思っています。そのためにも中学生に対する「認知症サポーター養成講座」は継続していきたいと思っています。

住民の意識が変化することにより「地域で認知症高齢者及び介護者を支える」風土が醸成されることを目標に息長く「地域との三つ関り」を続けていきたいと思っています。それが社会福祉法人の役割ではないかと考えています。

今後の展望(三つの関りを継続すると…)



11

事業の概要

～リデル・ライト両女史の愛と奉仕の心を受け継いで～



社会福祉法人 リデルライトホーム

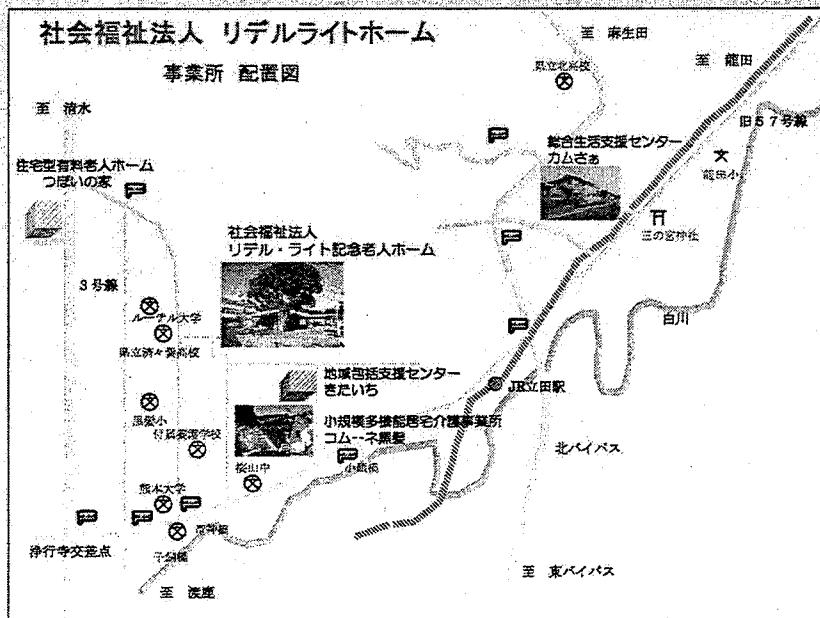
所在地：〒860-0862 熊本市黒髪5丁目23番1号

☎：096-343-0489 FAX：096-343-0476

URL：<http://www.riddell-wright.com/>

＜社会福祉法人リデルライトホームの沿革＞

- 明治26年 4月 3日 ミス・リデルは、本妙寺において初めてハンセン病患者を見てその救済を志す。
その後、(1893年) 牧崎町に臨時救護所を開設。
- 明治28年11月12日 ミス・リデルは、当地で熊本回春病院(建物10棟、患者38名)を開設。
- 明治39年 9月22日 熊本回春病院、財団法人の認可。
- 明治40年 3月18日 法律第11号「癪予防に関する法律」制定発令。
- 昭和 6年 3月15日 貞明皇后の御下賜金を基金に財団法人癪予防協会を設立。
- 昭和16年 2月 3日 熊本回春病院閉鎖。
- 昭和17年 6月25日 財団法人癪予防協会により、未感染児童・保育施設「立田寮」開設。
- 昭和21年 4月 1日 「立田寮」国立療養所菊池恵楓園に移管。
- 昭和26年 5月30日 保護施設「リデル・ライト記念養老院」の設置認可。同年9月1日事業が開始。
- 昭和27年 5月28日 社会福祉法人癪予防協会設立と保護施設が認可される。
- 昭和32年 3月31日 児童の転出を完了し、立田寮事業を廃止。
- 昭和38年 8月 1日 老人福祉法施行に伴い、施設名「リデル・ライト記念養老院」から
養護老人ホーム「リデル・ライト記念老人ホーム」へ改称。
- 昭和45年 3月25日 社会福祉法人「癪予防協会」から社会福祉法人「リデル・ライト記念老人ホーム」となる。
- 平成 3年 6月 1日 特別養護老人ホーム「リデルホーム」養護老人ホーム「ライトホーム」
ユウカリ苑デイサービスセンターB型 老人短期入所事業(特養併設)を新・改築し事業開始。
- 平成 5年12月22日 在宅介護支援センター「リデルホーム」を開設。
- 平成 6年 4月 1日 ユウカリ苑デイサービスセンターB型(現在の認知症対応型通所介護)開設。
- 平成 8年 4月 1日 老人居宅介護等事業(ホームヘルプサービス)を開設。
- 平成11年 9月 1日 公益事業「リデルホーム居宅介護支援事業所」の指定を取得。
- 平成12年 4月 1日 介護保険制度開始。
- 平成15年 8月 1日 小規模ケアホーム「つばいの家」(現在、住宅型有料老人ホーム つばいの家)を開設。
- 平成16年 4月19日 小規模ケアホーム「くろかみの家」(現在、小規模多機能型居宅介護 コムーネ黒髪)を開設。
- 平成17年 7月 1日 総合生活支援センター カムさあ(デイサービスセンター、グループホーム)を開設。
- 平成17年11月12日 リデル・ライト記念降臨教会聖堂 聖別式(回春病院設立110周年記念)
- 平成18年 4月 1日 熊本市(黒髪・龍田生活圏域)地域包括支援センター「きたいち」開設。
- 平成19年 3月 1日 小規模多機能型居宅介護事業所「コムーネ黒髪」開設。
- 平成19年 4月 1日 養護老人ホーム「ライトホーム」から特定施設入居者生活介護へ事業変更。
- 平成20年 4月18日 法人名を社会福祉法人リデルライトホームと改称。



活動報告(3)

活動名称	認知症メモリーウオーク・千葉
活動要旨	平成19年に日本初の「認知症メモリーウオーク」を官民協働で実施。実行委員会方式により準備から当日まで様々な立場の人が協力しあい、その過程の繋がりが当日のパレードに結実。共に歩くことで認知症の方と家族の心を開くことに繋がっている。
応募者	第2回 認知症メモリーウオーク・千葉実行委員 委員長 助川 未枝保
連絡先	〒289-0226 千葉県香取郡神崎町神崎神宿 66-10

1)推薦理由

- ・ パレードという短発的な活動のようではあるが、実行委員会方式により準備から当日まで様々な立場の人が協力しあい、その過程のつながりが当日のパレードに結実している。
- ・ 今年は2回目の取り組みであり、県下に着実に広がりをみせ、海外への広がりも見られる。認知症の人をより良く理解してもらうためのPR効果も高く、成果が上がっている。他の地域への波及可能性も高い。
- ・ 認知症の人の参加にも力点が置かれており、当日は車イスの人も含む多くの人が共に参加し、当日参加できない人もメッセージをかけた「うちわで参加」するなど、本人が主役となる配慮・工夫が見られる。広域型・地域型に分けての開催で地域に応じた展開がされており、今後の発展が期待できる。

2)3月7日キャンペーン発表会 <インタビュー抜粋>

町永◆メモリーウオークを始める前は手探り状態だったそうですが、どんな不安がありましたか。

助川◆1つには、みんながメモリーウオークを理解して集まってくれるかということを心配しました。2つめは、警察からいわれましたが、パレード形式は非常に高いリスクがありました。参加者520名のうち150名がボランティアスタッフでしたが、横断歩道全部に2人ずつ立ち、お年寄りにも危なくないよう誘導していただき、とてもありがたかったです。

町永◆お年寄りも多かったということは、認知症の方や家族もいらしたのでしょうか。メモリーウオークをやってみての手ごたえ、反応はいかがでしたか。

助川◆出発式のセレモニーのときに、本人の方がいらして下さって、その方は英語、中国語、日本語など4ヶ国語を話すんですよ。本人が出発式のときに歩きましょうとおっしゃって下さって、そこでまた心が一つになって歩き



出せました。みなさん、それぞれ役割も担っていただけました。

町永◆メモリーウオークは今年、3回目の実施になりますね。今後はどのように広げていけますか。

助川◆地域の中から開催したいという声をいただき、どんどんバトンタッチして広がってくれればいいなと思います。

町永◆タテにもヨコにも広がってくれればいいですね。

3)3月7日キャンペーン発表会 <発表資料>

認知症メモリーウオーク・千葉



第2回認知症メモリーウオーク・千葉実行委員会

日本初！認知症メモリーウオーク・千葉

1994年の国際アルツハイマー病協会国際会議
で9月21日を「世界アルツハイマーデー」と宣言



諸外国ではこの日を中心にこの病気に対する街頭
啓発活動として「メモリーウオーク」を盛んに開催
しかし、日本ではおこなわれていない



千葉から日本初として「認知症メモリーウオーク・
千葉」を実施

実行委員会方式

民間と行政とが力を合わせて実行委員会を設立



様々な職種の人たちによる、様々な意見を融合



平成19年9月16日(日)

日本初！「認知症メモリーウオーク・千葉」開催！

第2回認知症メモリーウオーク・千葉



○ 集合：千葉県千葉市中央区(千葉県庁前)

○ 日時：平成20年10月13日(月・祝) 10:00～

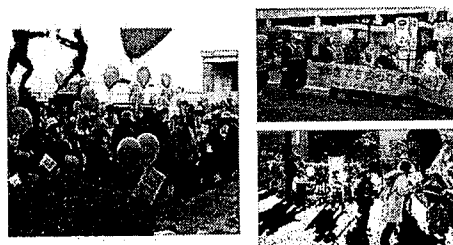
認知症メモリーウオーク・千葉in香取



○ 集合：千葉県香取市佐原(佐原文化会館)

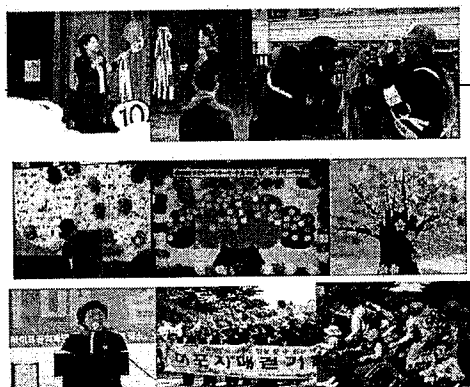
○ 日時：平成20年10月19日(日) 10:00～

認知症メモリーウオーク・千葉in佐倉



○ 集合：千葉県佐倉市ユーカリが丘(よろこび広場)

○ 日時：平成20年11月29日(土) 12:45～



広げよう！認知症メモリーウオーク・千葉

- 認知症の人、家族、介護従事者、行政など
の横のつながり
- 子供から大人までの年齢層の縦のつながり



「認知症になっても住みやすい千葉を」の
イメージが、縦横の織りとなって広がっていく

4)キャンペーン応募資料(全)

1. 概 要

【はじめに】

住みなれた町で安心して暮らしたい。誰もがそう願うように、認知症になっても思いは同じです。

今後、団塊の世代の高齢化が進むにつれて、認知症高齢者の更なる増加が予想され、その影響が懸念されています。この増加にあわせて認知症への対応を考えたとき、認知症の人の生活全般を支えるためには、認知症が、「病的な変化によるもの」とあたりまえに理解されるようになり、保健・医療・福祉・地域住民が連携した支援体制が整っていなければなりません。

認知症の人が安心して暮らし続けることを追及することは、地域に暮らす全ての人にとって、とりわけ、高齢者や子ども、障害者など、支えを多く必要とする人にとって、住みよいまちをつくることにつながっていくものと思います。そんな思いから、「認知症メモリーウオーク・千葉」は生まれました。

【「認知症メモリーウオーク・千葉」の実施】

認知症の理解が地域に行き渡り、偏見などなくなれば、認知症になっても住みなれた町で暮らし続けられます。そのためにも、認知症の人と家族、一般市民、医療、福祉、介護従事者など、地域で生活している様々な人たちが、手を取り合って、共に暮らしていくことが大切です。

諸外国（カナダ、米国、英国、オーストラリア、オランダ、台湾、キューバ等の様々な国）で、アルツハイマー病の理解と、社会への啓発活動を目的に「メモリーウオーク」（パレード）が盛んに行われているのに対し、日本ではまだ行われていないことから、千葉から日本初として「認知症メモリーウオーク・千葉」を実施しようと提案しました。

認知症について、多くの人に関心を持ってもらうためにも、また、様々な立場の人たちが手を取り合い、暮らしていくためにも、気持ちをひとつに共に歩くことは、社会に対して認知症の理解を求めると同時に、閉じこもりがちな認知症の人と家族の心を開くことにもつながります。認知症になっても安心して暮らせる地域づくりを目指す第一歩になります。



【官民協働の実行委員会方式】

日本初の「認知症メモリーウオーク・千葉」の実行の実務に関しては、「実行委員会方式」を取りました。千葉県認知症対策研究会のメンバーと、千葉県、千葉市の高齢者福祉担当者を含む官民協働で「認知症メモリーウオーク・千葉」の実施に向けて、話し合いました。発想も立場も違う人たちの様々な意見を融合させて、1から企画を考えていきました。

【平成19年度の実績】

平成19年9月16日（日）、日本初の「認知症メモリーウオーク」を開催しました。予定していた人数を大幅に超えた、520人の参加者が集まりました。また、当日参加できなかった、特別養護老人ホームやグループホームの方々は、ウチワに画を描いて思いを託し、「ウチワでの参加」を行い、その思い（ウチワ）を参加者が持って歩きました。「認知症でも安心な千葉に！！」をテーマに、皆の気持ちが1つになりました。

また、参加者だけではなく、各企業にも、この趣旨に御賛同いただき、多くの寄附を頂きました。このように、多くの方の協力の下、日本初のメモリーウオークは、物心共に多くの協力を得て成功裏に幕を閉じました。

【平成20年度の実績】

平成20年度は、昨年と同じ「実行委員会方式」を取り、自主的に皆さんが集まって、どのように継続していくのか、広域性を持たせるのか話し合いました。

そして、より多くの地域に認知症についての理解を求めるため、広域型と地域型の形式にして、広域型については、平成19年度同様に千葉県全域から参加者を募り大規模なパレードを10月13日に実施し、地域型については、地域のカラーを活かした小規模なパレードを、香取市で1月19日、佐倉市で11月29日に実施しました。

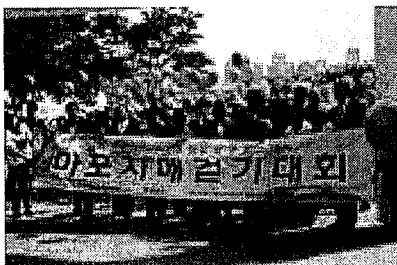


広域型から地域型へとつなぐシンボルとして、特別養護老人ホームのお年寄りが作った「千羽鶴」をバトン代わりに、各開催地につなげていきました。昨年度よりも施設を利用されている方が多く参加し、認知症本人が楽しんでいる様子を目にして、主催者もほっとしました。



このつながりは、来年、再来年とより多くの市や町に広がっていかうと考えています。

【千葉から海外へ】



韓国初！ソウルで

「認知症メモリーウオーク」

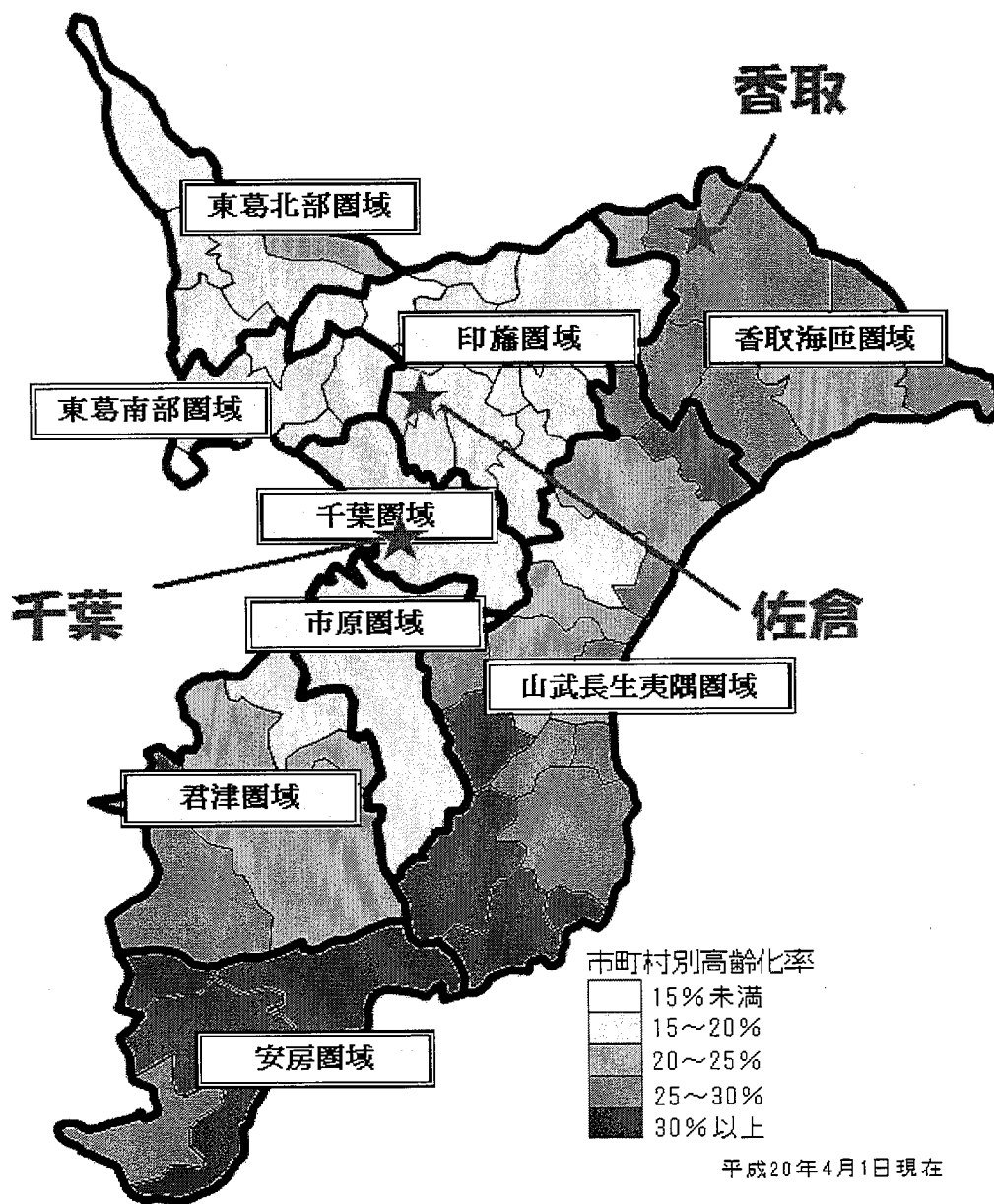
平成20年度は、もう1つ嬉しいニュースがありました。それは、平成19年、平成20年度と2年連続、海外から「認知症メモリーウオーク・千葉」に参加していただいた、韓国アルツハイマー病協会会長、李 聖姫（リ スンヒ）氏が、韓国ソウル市で韓国初の「認知症メモリーウオーク」を実施したことです。千葉から韓国へ……。このように国内だけではなく、海外に発信できたことは、とても素晴らしいことと感じています。

2. 地域の紹介

【千葉県の高齢化の推移】

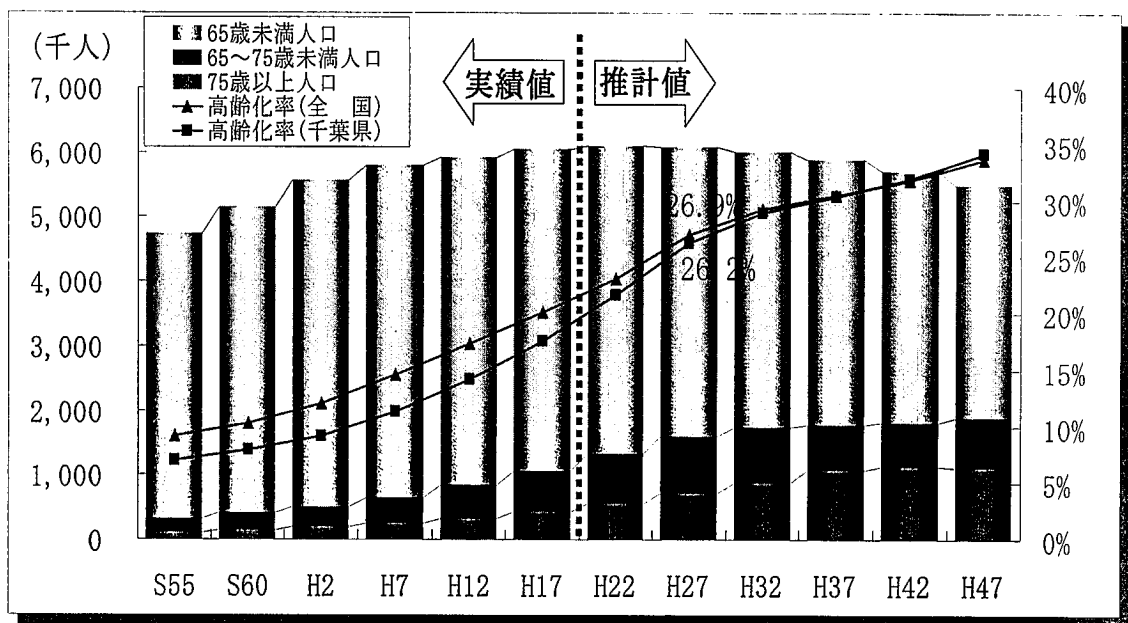
千葉県では、平成20年4月1日現在における65歳以上の高齢者は、約118万人（構成比19.1%）、そのうち、75歳以上は約48万人となっています。

メモリーウオークを実施しました、千葉市は約17万1千人（構成比18.3%）、香取市は約2万2千人（同25.5%）、佐倉市は約3万4千人（同19.3%）となり、高齢化率は、県内で比較すると、千葉市42位、香取市20位、佐倉市34位になります。



今後、高齢者人口が全国第2位のスピードで急増し、平成27年には、約160万人（構成比26.2%）、平成37年には約175万人（同29.7%）、平成47年には約180万人（同32.7%）と急増することが見込まれています。

千葉県の高齢化の推移と将来推計



※昭和55年から平成17年までは総務省統計局「国勢調査結果」による（10月1日現在）。
※平成22年以降は国立社会保障・人口問題研究所「日本の都道府県別将来推計人口（平成19年5月推計）」による推計値。

【千葉県認知症高齢者の増加】

平成17年における千葉県の認知症高齢者数は、約7万人と推計されていますが、平成20年7月に厚生労働省研究班が発表した推計によると、平成47年には千葉県は22万4千人と、平成17年に比べ、2.9倍の増加が予想されています。これは、全国2番目の増加度になります。

3. 活動の内容

【平成18年度～千葉県認知症対策研究会の発足～】

千葉県認知症対策研究会は、平成18年7月14日に設立されました。この研究会は、認知症の介護家族、ケアマネジャーや社会福祉士などの介護従事者、医師や看護師等、高齢者に携わっている様々な職種の人がボランティアで集まり、介護現場の実情を踏まえた意見を出し合いながら、千葉県の高齢者保健福祉計画の施策に提案し、その具体化を検討する組織です。

高齢化が急増する千葉県で、高齢者が介護や支援を要する状態になっても、個人の尊厳を保ちながら、住みたい場所で安心して暮らし続けることが出来る地域づくりを基本方向として、研究会を行っていました。

介護や医療の各方面からの視点で検討した結果、6つの項目を基本とする6本の柱として考え、認知症になっても安心して暮らせる地域づくりを目指しました。

その柱のひとつに、「認知症の正しい理解と普及」を上げました。そして、地域住民への認知症の理解をしてもらうために、何をすれば良いのかを、さらに検討しました。

その結果、より多くの人に認知症に対する理解を求めるためにも、「認知症でも今までどおり住みなれた千葉で暮らしたい」という気持ちをこめて、日本初の「認知症メモリーウオーク・千葉」を開催することにしました。

認知症になっても安心して暮らせる地域づくり（6本の柱）

- ①正しい理解と普及・・・認知症メモリーウオークの開催、啓発用DVDの作成等
- ②認知症予防・・・認知症予防の普及啓発等
- ③早期発見・早期対応・・・認知症健診制度の実施、地域医療体制の充実等
- ④相談体制の整備・・・相談窓口の周知と連携等
- ⑤権利擁護体制の充実・・・成年後見制度の周知・活用等
- ⑥人材育成・・・研修以外の人材育成等

【平成19年度～日本初の「認知症メモリーウオーク・千葉」の開催～】

日本初の「認知症メモリーウオーク・千葉」が開催されました。多くの県民と、認知症の人とその家族と共に、また、千葉県老人クラブ連合会の方にもたくさん参加していただき、大いに盛り上がりました。

- (1) 日 時 平成19年9月16日（日） 受付 9:30 ～
開会 10:00 出発 10:30 ～ 12:00 解散
- (2) コース 県庁～中央公園～JR千葉駅手前
- (3) 参加者 520人

「メモリーウオーク・千葉」キャラクター はあとくん→



【平成20年度～広げよう！「認知症メモリーウオーク・千葉」ふたたび～】

「認知症になっても、いままでどおり住みなれた千葉で暮らしたい」という皆の気持ち。そのためにも、認知症の人にも優しい町がたくさんできますように。そんな思いから、平成20年度の「認知症メモリーウオーク・千葉」は、「広げよう！」をメインテーマとし、広域型と地域型に分けて県内3か所で開催しました。広域型は千葉市で平成19年度同様に千葉県全域から参加者を募り大規模なパレードを10月13日に実施し、地域型については、地域のカラーを活かした小規模なパレードを、香取市で10月19日、佐倉市で11月29日に実施しました。

○広域型「第2回認知症メモリーウオーク・千葉」の開催

(1) 日 時 平成20年10月13日(月・祝日) 受付 9:30～

開会 10:00 出発 10:30～12:00 解散

(2) コース 県庁～中央公園前～県庁

(3) 参加者 408人

(4) 参加対象者 一般県民、認知症の人とその家族(介護者)、福祉・医療・保健関係者、施設従事者等

(5) 参加費 無料(保険料は、主催者負担)

(6) 雨天決行、荒天中止

(7) 主催 第2回認知症メモリーウオーク・千葉実行委員会

(構成団体：第1回認知症メモリーウオーク・千葉実行委員会、千葉県、千葉市、目的に賛同する者及び団体等)

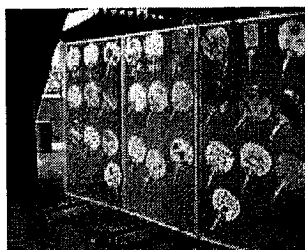
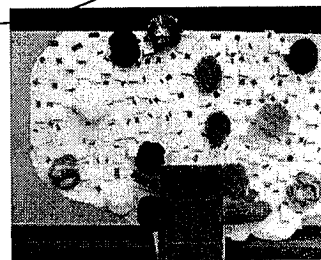


コスモスがとても綺麗に咲いていました。爽やかな秋風に吹かれて、揺れているその姿は、まるで皆を「頑張っ
て！」と応援しているようでした。

(8) その他 次のような企画も実施しました。

・メモリーツリー

参加者の方の声を思い出に残したい！という気持ちから、平成20年度は「メモリーツリー」を行いました。このメモリーツリーは、葉に見立てた付箋にメモリーウオークから帰ってきた人が一言感想を書いて、木の絵を描いた模造紙に貼ってもらうという催しです。



・ウチワでのメモリーウオーク参加

参加できない認知症本人などに、事前にウチワへメッセージ等を描いてもらい、その思いのこもったウチワを会場に飾り、また、参加者がもって行進しました。

・フリフリグッパ

「出発するには、チョット時間があるな。」「パレードが終わったけれど、もうチョット体を動かしたいな。」そんな人たちが集まって、「フリフリグッパ体操」を行いました。この「フリフリグッパ体操」は、筑波大学大学院人間総合科学研究科の征矢英昭助教授が開発された「脳フィットネス」の体操です。うつ病、認知症、転倒の予防、生活不活発病の予防などの効果があるとされています。船橋から「桐畑フリフリグッパ体操クラブ」の方たちがボランティアで駆けつけてくれました。



・DVDの上映

平成 19 年度に千葉県認知症対策研究会の提案により、「認知症の正しい理解と普及」の 1 つとして作成したDVD「支えあう認知症ケア」を上映しました。

・完歩証

「頑張ってパレードに参加していただいた皆様に、記念になるものを」と思い、ゴールした皆様に水のペットボトルと一緒に「完歩証」をお渡ししました。

・福祉用具の展示

福祉用具業者の方に協賛として、福祉用具の展示をしていただきました。

○地域型「認知症メモリーウォーク・千葉 in 香取」の開催

(1) 日 時 平成 20 年 10 月 19 日 (日) 受 付 9:30 ～

開 会 10:00 出 発 10:30 ～ 12:00 解散

(2) コ ー ス 佐原文化会館前～小野川沿い～JR 佐原駅前～佐原文化会館前

(3) 参 加 者 145 人

(4) 参加対象者 一般県民、認知症の人とその家族 (介護者)、福祉・医療・保健関係者、施設従事者等

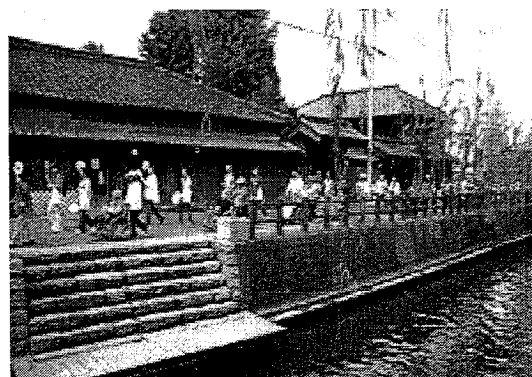
(5) 参 加 費 無料 (保険料は、主催者負担)

(6) 雨天決行、荒天中止

(7) 主 催 認知症メモリーウォーク・千葉 in 香取実行委員会

(構成団体：目的に賛同する者及び団体等、千葉県、香取市)

佐原の風情ある古い町並みに、一列に並んだオレンジの風船は、まるで皆の願いで膨らんだ、大きなホオズキのように目に映りました。



(8) その他

・メモリーツリー

香取では、秋らしく紅葉した木をイメージして、メモリーツリーを作りました。色鮮やかな素敵な木になりました。

・完歩証

「頑張ってパレードに参加していただいた皆様に、記念になるものを」と思い、ゴールした皆様に「完歩証」をお渡ししました。



○地域型「認知症メモリーウオーク・千葉 in 佐倉」の開催

(1) 日 時 平成20年11月29日(土) 受付 12:00 ~

開会 12:45 出発 13:00 ~ 13:30 解散

(2) コース 京成ユーカリが丘駅(よろこび広場) ~ ユーカリが丘南公園

(3) 参加者 176人

(4) 参加対象者 一般県民、認知症の人とその家族(介護者)、福祉・医療・保健関係者、施設従事者等

(5) 参加費 無料(保険料は、主催者負担)

(6) 小雨決行、荒天中止

(7) 主催 認知症メモリーウオーク・千葉 in 佐倉実行委員会

(構成団体：市民代表、千葉県、佐倉市、佐倉市地域介護相談センター)



子どもたちが、近代的な超高層マンションの脇を通り抜けて歩いていきます。皆に優しい町にするためにも、色々な世代の人が手を取り合っていきたいです。

(8) その他

・メモリーツリー

佐倉(さくら)では、さくらの木をイメージして、メモリーツリーを作りました。一足先に春が来たような、華やかな木になりました。

・完歩証

完歩証も、メモリーツリー同様に、さくらカラーを出そうと、さくらの花びらを散らしたものを作成しました。とても可愛い完歩証になりました。



4. 活動の成果と今後の発展

【活動の成果】

平成 19 年度は、手探り状態で始まった日本初の「認知症メモリーウオーク」。とにかく、皆が必死で考え、無事実行することが出来ました。当日のお昼のNHKニュースでも取り上げられ、新聞、雑誌など 15 社から取材がありました。

また、参加者からも「来てよかった」との感想もいただけて、予想以上の手ごたえを感じました。

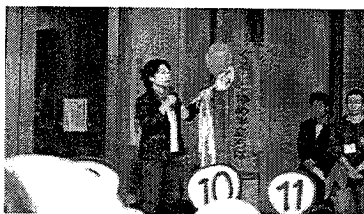
そして、平成 20 年。もっとたくさんの人に、認知症になっても住みなれた地域で暮らせる、そんな優しい町づくりをしていきたいという思いを伝えていくため、昨年度のように 1 か所ではなく、広域型（千葉市）と地域型（香取市、佐倉市）の 3 か所で開催しました。

各開催地の実行委員の方が工夫を重ねていただいたお陰で、開催地独特のカラーがとても良く出た「認知症メモリーウオーク・千葉」になりました。認知症をアピールするにも、やはり、それぞれの地域性があります。その特色を活かしたPRをすることで、町全体に広がっていくのだと、気付きました。数箇所で行うことにより、今まで見えなかったものが見えてきました。

○広域型（千葉市）

平成 20 年度のメモリーウオークは、認知症本人の方が多く参加しました。開会式の参加者代表挨拶、進行出発の発声も、認知症の本人が行いました。本人の挨拶は、英語を交えたとてもグローバルな挨拶をしてくださり、参加者の皆様は驚いたり感心したりでした。

また、昨年度同様に開催当日のNHKのお昼のニュース、地元放送局で取り上げられ、さらに多くの方に周知してもらうこともできました。



10:00～開会式 各地域に広げていくバトン代わりに千羽鶴



出発進行！

千葉国体の
キャラクター
「チーバくん」。
応援に来て
くれました。

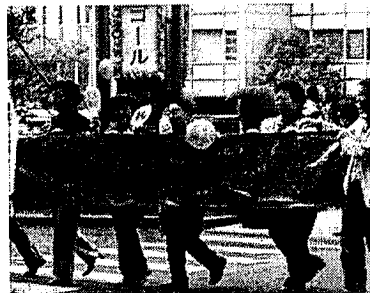


10:30～パレードスタート！
ゆっくり、楽しく歩いています



無事ゴール

完歩証と記念品を渡しました
皆さんの笑顔がとても感動的



(参加者からの声)

- ・ たのしかった！！ 来年も参加したいです。
- ・ 初めて参加しました。道々介護の話がつきませんでした。介護家族の交流の場にもなりました。
- ・ 子供3歳と一緒に歩きました。私も祖母も、母も、子も介護されたり介護したりが楽しくできるといいな。
- ・ 認知症を知って介護するのと、知らないで世話することとは不安が全然違うので皆様に知っていただきたい。
- ・ 今日は皆さんと歩けてよかったです。認知症に対する理解が深まりますように！！

○地域型（香取市）

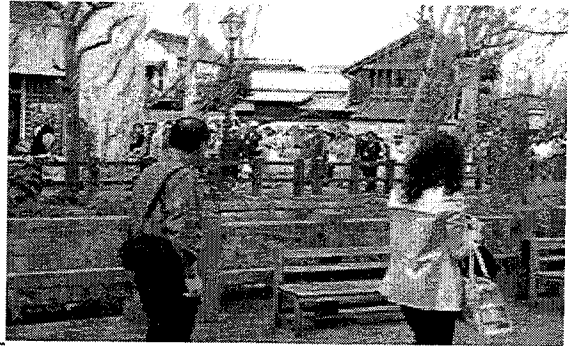
香取市は、観光名所の「小野川沿い」を歩くことにより、地域住民はもちろんですが、観光客にも認知症のPRができたことが、この地域ならではの特徴でした。また、商店街の方たちにも「何をしているの？」と声をかけていただけました。このように関心を持っていただけることは、優しい町づくりにつながっていくだろうと強く思います。

もう1つの特徴としては、広域型ではできなかった、全体が切れ目なく一列で歩くことができました。まさに「パレード」といった感じです。



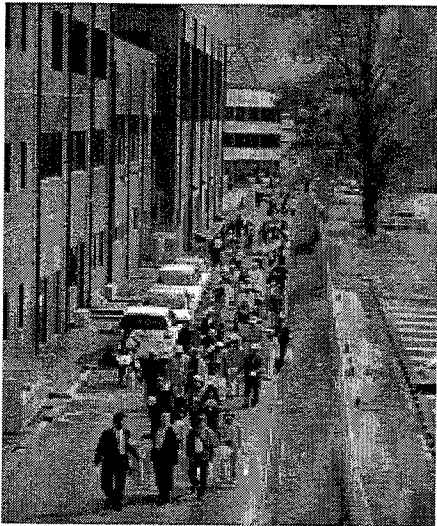
10:00～開会式





10:30～パレード開始 「いってきまーす！」

「おや？何だあれは・・・？」



香取市にも、チーバくんが応援に来てくれました。

「皆さん、お疲れ様でした！」

(参加者の声)

- ・お天気に恵まれて楽しく参加できました。町並みを眺めるのもいいものでした。
- ・歩き疲れたけど色々な方に認知症についてアピールできたと思います。
- ・久しぶりのウォーキングとても良かったです。皆で認知症の方を支援していきましょう。

○地域型（佐倉市）

佐倉市は、子どもたちが多く参加しました。子どもたちには、認知症を理解してもらうため、「認知症サポーター養成講座」をメモリーウォークの開会式の数日前に行いました。

また、メモリーウォークのゴール地点の近くのコミュニティセンターにて「認知症予防講演会」が佐倉市主催で行われ、各世代の方たちが認知症への理解を深めました。

このように、大人から子どもまで、各世代にわたり認知症についての知識を持ってもらうことにより、皆で助け合える、みんなに優しい町になっていくことを願っています。



子どもたちに「認知症サポーター養成講座」

12:45～
開会式で
千羽鶴の
引継ぎです





皆さんも一緒に「GOー（ごー）！！」



13:00～パレードスタート！



無事みんなでゴール！お疲れ様！

スタッフはオレンジの帽子、参加者はオレンジのゼッケンをつけて歩きました。

(参加者の声)

- ・主人が認知症なので、これだけ応援してくれる方がいて、涙が出るほど嬉しかったです。
- ・来年もやってください。
- ・天気にも恵まれて、気持ちよく歩けました。

○千葉から海外へ

今年は、「認知症メモリーウオーク・千葉」が海外に発信できた年でもありました。

平成 19 年、平成 20 年度と 2 年連続、海外から「認知症メモリーウオーク・千葉」に参加していただいた、韓国アルツハイマー病協会会長、李 聖姫（リ スンヒ）氏が、韓国ソウル市で韓国初の「認知症メモリーウオーク」を今年実施しました。



李 聖姫(リ スンヒ)会長あいさつ



【今後の発展】

認知症の理解が社会に広がり、認知症の人も社会の中で普通に暮らせるように、との願いをこめたメモリーウオークは、すでに来年への繋がりが見え始めました。実行委員会形式で行った成果として、認知症の人、家族、介護従事者、地域、行政など関係者の横つながり、子どもから 90 歳代の人まで、年齢層の縦つながりなど、「認知症でも住みやすい千葉を」のイメージが縦横の織りとなり、着実に広がりを見せてきました。これから地域によってどんな色合いを織り成していくか、もっと多くの日本国内開催へ、アジアへと、拡がりを期待しています。